箱根靈驗躄仇討

作者　司馬芝叟

爰ゝ高富の太功久吉公のは籏下ゝ、飯沼勝五郎元治といふ英士有、復仇の爲諸國ゝて危難を凌ぎ年來の愁眉を拂ふ、時津風義心ゝ惠む天正のは代の春こそ豐なれ、其比太功の嚴命ゝよつて、城劫伏水の桃山ゝ於て、は居城新ゝ築せ給いん迚、執權柾桐壹岐守龍元、惣支配として小頭ゝいん飯沼三平佐藤剛助、其外數多の諸役人、日〻仮家ゝ相つめて上を見習ひ大樣おゐ、鶴の歩の春の日も、早西山ゝ傾ぶ、定めの拍子木かつち〳〵、普請の終り身の廻り手早ゝ去やんと人足共、お暇貰ひ立歸る、亂世の英雄治世ゝも、直成柾桐壹岐守龍元、普請場見廻り仮小屋へ、同勢從へ入來れい佐藤飯沼出向ひ、柾桐公ゝいは繁多成お身を以て、普請場のは見分一入は苦勞千萬先あれへお通りと、兩士が挨拶其儘ゝ、座上ゝ通り席を

定め、は普譜も過半出來、は兩所共は出精の程相見へヲた、此度我君久吉公明智柴田の大敵を切鎭め、自然と天が下を掌握し給ひし國海太平の大功、和漢ゑ比類おしと、今上皇帝正親町の院敵感の餘り、高富の太功と任ぜらるゝ事、此上もなき眞柴家の面目、是ゑよつては悦びの餘り、猶々万歳の功有せられんと、要害の地ゑは居城を、築き給わんは賢慮ゑて、當伏見桃山ゑ、地理を見立、自下知して間竿を、打せ給ふ程の名大將、今日も見分仕るゑ、凡海内ゑ是程の地の理、今一ヶ所有まじと存る、我々有難きは、世ゑ生れ出、斯る名君ゑは奉公仕る事仕合と ヲ べきかたとへん方おし、各方も左樣存られ、此上ゑも忠勤厲まれてよからふと、只仮初の咄ゑも、人を導く柾桐が、心の花ぞ芳しき、三平大ゑ感じ入、柾桐殿の仰のごとく、數ならぬ拙者迄、名君ゑは奉公ヲせパこそ、斯太平の恩澤を蒙り、枕を高く母弟ゑ至る迄、安穩ゑ撫育仕る事、冥加もなき仕合と、實意の詞先折

剛助、イヤ〳〵三平殿、貴殿ハ兼々篤實の人柄だと存じたが、只今のぬらし方抔ハ、當世でござる、イヤ夫が德でござる、立よらバ大樹の蔭、當時諸士を立ふと伏ふと、心任せの柾桐殿ハ大樹、其蔭へ立寄てお髭の塵とハ大分よいお心がけでござる、ハヽヽ、イヤ剛介殿、某が給ハる三千石ハ四國攻の高名鎗先で頂戴仕たに知行、詞を飾り口先で立身を願ふ樣な比興未練な三平でハござらぬぞ、イヤ比興よない共ヤされぬ、スリャ又どふして、されバさ、今貴殿何とゆつた、太平の恩澤を蒙り、枕を高く母弟を育むが有難いと悦んだでないか、いかよも左樣ヤたが夫が何と致たな、比興でござる、ヤヽヽイヤサ臆病でござる、纏はつち坊主の報謝米程の御知行を貰つて、太平が有難いとハ武士の風上よも置れぬ比興者、拙者などハ斯太平よ相成たが齒がゆふござる、只今よも合戰でござらバ、花〻しい高名致して大名よ成まする、只今の樣な小身者でおるが、甚以てむやくい、併剛助抔ハ口先でぬ

つぺりこつぺりやれ、大不調法ぢやよつて、哀乱世よもなれかしと願ひまするのでござる、飯沼氏比興者の因縁由來此通りと、日比の偏執よき折と、おとりよしたる詞質喇叭せられて短氣の飯沼、柄よ手をかけぐつと詰かけ、武士よ向つて聞よくき雑言左程乱世を樂しむ其方、四國攻の先陣よ加へり小坂部方ゑ打出した、鉄炮よ脊をかすられ、道端へ倒たを忘れたか、其時此三平が欠付ねば、只今其首へ物云ぬぞよ、命の親よ無法の雑言、思ゑらずめと言まくれば、剛助も氣色をかへ、戰場の勝負へ時の運、いかゐ名將勇士でも、おくれを取へ有ならひ、左程高名自慢なら剛助が手並を見せふか、見るぞよ、見せるぞよ、サア〳〵と、兩人が柄よ手をかけ詰寄ば、征桐暫しと押留、益なき詞の爭論ゑ討果し、どの命を以て、奉公へやさるゝぞ、夫へ兩人共不思でござらふ、嗜召れと執權の詞へ自然の威よ押れ、はつと計よ兩人へ白洲よ、低頭なしよける、早初夜

告る時討の數、壹岐守耳そべだて、よしもなき爭論よ餘程の隙入早初更、各方い休足有れよ、去あがら此後迎も意根殘さず、ぼ奉公が第一心得召れ、と立上り剛助を尻目よかけ、詞よ言ねど飯沼が心の清水汲てえる仁者よ隨ふ兩人が、善惡てらす挑灯の、一筋道を諸同勢隨ひてこそ「急行

二冊目

朧月夜よ、えく物いなしとい、讀と小夜更て、いとえん〳〵と金城よかけ渡したる足代い、霜とさへ行、蛙の聲、物すごく見へよけり、戀かあらぬか年の頃、十七八と思しき女、走躓き跡先見廻し見廻す其風情、猿卷姿のえどもなく貯へ持し小硯取出し、傍よ茂る薄の葉取むしりてい書文字も、朧〳〵の川水へ流すと更よ白露の、道踏分て飯沼三平、此躰見るゑ猶豫しが、正敷狐狸の妖怪あらんと、つと寄て詞をかけ、此邊よ見馴ぬ女、定て狐狸の類ひならん、正躰を顯いせと、刀するりと拔放せば、女いはつと

わなゝきて、物をも言ず逃行を、救ハせじと付廻せば、うんとのつけゝ倒れ伏、三平怪しと透し見て、扨ハ人ゝて有けるゝと、印籠ゝ取出す氣付口押割て含ますれば、漸〳〵心付たりけん息吹かへせば、女氣が付たか、心を慥ゝ〳〵と、云顔玄つと、ゝと、おたかハ存じませぬが、添いハ介抱、そふして今お藥を下さりましたハ、あなた様でござりまするかへ、いかゝも身共、其元を殺さふと致せしも某でござる、ゝ、とふやらどき〳〵と、ゝ、不審ハ尤、身ハ當所ハ城普請の役人、飯沼三平と申者、今宵役目を相仕舞立歸りよく見れば、差添の小柄紛失扨ハ普請場ゝて落せしや、又歸るさの道ゝやあらんと、尋戻りしも彼小柄ハ太功ゝ拜領の品、去ゝよりて捨置れず搜し求る此所ゝ、怪しげ成其振舞、正しく狐狸の類ひと心得、討捨んと思ひの外、正氣を失ふ其有樣、扨ハ人なりと心付斯ハ介抱致したり、去ゝても若き身の、愁ゝ沈むハ心得ず、あかゝさまゝ子細を申せ、事ゝ寄ば

此三平、力と成て得させんと、能侍ゝ情をも辨へ去りし慈愛の詞、女ゝ世よも嬉しげよ便りなき身を其樣よ、いふて給ゝるお詞よあまへて下一通り、お聞なされて下さりませ、私ゝ勝と下て親里ゝ津の國の田籔と下所、とゝ樣かゝ樣よおくれし跡、伯父樣の惡心よて此伏見の撞木町へ、私を欺して勤奉公、思ゝず此身ゝ川竹の浪の夜る〳〵仇枕、かゝさん事の悲しさよ、親方の内を拔出今此所へ身を投て、死ふと覺悟ゝ極しかど、私が死でゝ二親を吊ふ者もないゆへよ、責て薄を手向よと、お經を書て流す内あなたのお目よかゝりしゝ、未來のとゝ樣嚴樣の導き給ふ緣ならめ、便りなき身を不便共、哀と思し召ならば、お情かけて給ゝれと我身のうさよ、戀衣かけ願しひぞ哀れおる、始終を聞て三平も、不便の涙押ぬぐひ、身を捨んと思ふ今端よも、二親よ仕ふる孝心、其心よめで此三平、そちが願ひを叶へてくれん、ヱヽ、有難いと伏拜其手をしつと引寄て、ひつたり抱

き月かげも、雲がくれ行夜半の闇、かしこゝかけし普請の假家、假の契りの宿としていか成夢や結ぶらん、攝から又も、鳴出す蛙、かしこゝ茂る草井戸より、ぬつと出たる佐藤剛助、夜目ゝ輝く錦の袋、口ゝくゝへて立出れば、後ゝ窺ふ忍びの武士、がんどう指上、剛助首尾ゝ、氏直樣まんまと、コリヤ親氏政の頼みゝよつて佐々陸奥守成政が預り守る飛龍丸、奪ひ取しゝ天晴働き、〳〵小柄の手つがひゝ、夫ゝ上首尾、意恨有飯沼三平、彼が汕斷を見すまし、太功より拜領せし番獅子の小柄、盜み取て寶藏ゝ落し置ば、ゝ不審のかゝるゝ治定、其義、もゝ安堵下されいと、佞肝邪智の密談を、示し合する後の方、とくゝ窺ふ曲者が太刀引たくりつゝ立ば驚きながら、氏直剛助、一度ゝ拔て切込を、ひらりとかゝし霞の當身、倒るゝ兩人曲者ゝ、夜半ゝ紛れて失ゝける、夢見た樣ゝ起立兩人、コリヤとふじや、ヱ、折角奪た飛龍丸、宙からくすねた大盜人程ゝ行まいおつかけて、アイヤコリヤ待、曇太刀ゝ取れ

ても、科人ハ成政三平、ナコリヤかうと呶き默く其折から、假家よ人音兩人ハ別〳〵よ忍び行、かく共知ず仮家ゐゐよしをかハし立出る兩人お勝ハ名殘おし鳥の放れがたなき其風情、人目よ立ぺ互の妨、今宵ハ一先歸るべし、明なば身の代持せやり、身儘よなして得させんと宥て歸る三平を、見送る思ひ盡しなき、月よ移らふ立姿、窺ひ出て見とれる剛助、跡先構ハず抱付ぺ、お勝ハはつと突退て、逃行滯際引戻し、ゑつかりと抱ゑめ、ナコリヤく君よ、今月かげよそもじの容顔、ちよつと見るから、イヤモたまらぬ〳〵、ナコリヤなびけ〳〵と付廻す、お勝ハうるさく振放し、私風情よは大身の冥加ないお詞なれど、かゝ樣の大病お命乞の願參ヤどこえ、神參りとハきつい嘘最前から此所で、忍び逢た飯沼三平、黑い眼で睨んで置たぐど〳〵と云よや及ぺぬ、いやと云ぺぶち放す、どちらへ成と一口商ひ、ヤア女返事ハどふぢや、何と〳〵と强氣の剛介、逃ても逃さぬ毒蛇の口、命もきへ〳〵今宵

のせつぱ、とふぞ歎して此場をば、遁れん物と心を定め、賤しい此身を夫程ゑ、思ふて給いるお志、ほんゑ誓文添い、そんなら心ゑ隨ふ氣か、サアとふなりとするけれど、替り安いい男の心と、もたれかゝつて去つと取、戀の手ゑ葉い剛介が、生れてからの惚られ初め肩で息する斗なり、ふ勝いふかしさ押かくし、そふして私と斯成からい、外の女中と寐る事いならぬぞへ、抱て寐なとい、承知〳〵、ゑた其上ゑ夜さりも宵から内ゑ居て出歩行事いならぬぞへ、夫も合点承知〳〵、そんなら心ゑ隨ふけれど何ぞ慥な心中を、其心中も承知〳〵、と正氣なく現ゑ成たを見濟してそつと拔足遁れ行、とい去らずして剛介が、君よ〳〵何角いあい早く寐たいと見廻し〳〵、扨いたばかり逃歸つたな、ゑつくい女め是と云も三平めが有故、殊ゑい兼て意恨の飯沼ぶち放して此腹いせ、歸る屋敷い醍醐の坂口、先へ廻つて近道から、してていい任せと

尻引からげ、仮家より欠入取出す鑓、きらめく月も山の端より、入跡暗き戀慕の闇踏立てこそ「行空い次第より更る、夜嵐も、戀する身よい厭ひなく、お勝が袖の移り香より、心引れて三平が、歸るさ凄き藪つゞき早丑みつも過て行、とくより窺ふ剛介が、鑓引えごき後方聲をもかけず忍び寄り、脾腹をぐつとさしもの三平、尻居より座せしが素鑓の穂先ぱつしと切折、何やつなれば欺し討とい比興千万、性名名乗て勝負をせよ、剛介えやいい、四國攻の高名方佐藤が鑓先覺へたか、宵の意恨よな、夫斗だない元佐藤と飯沼い同祿同格、四國攻より高名仕負、うぬい加増して三千石我いへつえんして八百石平生意恨より思ふ上、今宵普請の仮小家へ、其方が引込女、我よなびけと口説共、汝より堅約束有故、是迚もいま〳〵しく重々恨みの此剛介より、言吐ずとくたばりおらふと、飽迄嘲哢三平い齒がみをなし、重々非道な極重悪人、三平が死物狂ひ、うぬも冥途の道連と、よろめ

く足を踏ゑめ〳〵、暫し時こそ移しけり、無念の飯沼身をかゝし、肩先摑んで引付れば、悔り仰天氣轉の剛介、袖切拂へばとつさりと、佛倒しゑ三平が身の成果ぞ哀ゑ、直ゑ股がり剛介が、とゞめさしんとする所へ、欠來る人音南無三と闇ゝあやなく遁れ行、お勝ゝ斯共露ゑらず、殘る名殘ゑ跡追ふて、ゑたひ來るゑ躓く死骸、心得ずと立寄て、透し見るゑはつと驚き、ヤア〳〵コリヤ三平樣じや、何者が手ゑかけた、ヤ我夫のふ三平樣と、聲をはかりゑさけんでも、今ゝかひあき亡骸ゑ、涙の限り歎きしが、思ゝず死がいの手ゑ摑む、袂をさぐつて心付、刀杁して傍へなる石ゑ向ふて、てう〳〵と打ゝ飛ちる火の光り、ちらりと胸ゑ覺への小袖、此片袖ゝ最前口説た侍め、扨ゝ我身の事を仇ゑ持、待伏して殺したよな、遠くゝ行まい夫の敵、夫よ〳〵と手ゑさゝゝる差添取てかい〴〵敷、跡を慕ふて追ふて行、かかる所へいつきせき、主人の迎ひゑ欠來る奴、血ゑすべつてコリヤ何だと、見

廻す傍へよ主人の有樣、ヤアコリヤコレお旦那が切れてござる、旦那〳〵と呼生る聲よむつくと起立三平、面体とつくと、ムそちや筆介か遲かつたいやい、ハアシテ〳〵お旦那を手よかけし、相手い何者、チ、敵い相役佐藤剛介、其方い立歸り我弟勝五郎よコリヤ無念なと傳へてくれよ、頼む〳〵の一言が現世未來の置土産生年卅一才を一斯の夢と見果ゆくうき身はかなや「定めなき

三冊目

狂雲月を憎み狂風花を嫉とかや、されぺ太功の恩澤よつて、關八州を領しながら、猶飽たらぬ欲惡無道、四海よ心かけ帽子、大紋の袖悠々と、聚樂の亭の大奥よ入來る北條氏政、續いて嫡子氏直親よ劣らぬ邪佞の相、鶴の一間い親子が諧所、一度よ打連打通る、振袖の内や床敷初昔、茶道の花香世よ高き、千の利休が娘の綾女、政所の召よより初めて出仕の奥深く、うい〳〵しくも打通り、北條親子と見るなも、はるかこなたにひれ伏

ゞ、氏政寛々と打見やり、其方い千の利休が娘綾女よな、今日い北の政所此殿よて太功のほめかけ淀町御前を請待のほ茶の湯、然るよ政所い相阿彌紹鷗の御弟子よて、當時流行の利休が風とい替り古代なれゞ、其方を召寄られ、取合せ萬端ほ相談是有樣と、佐々陸奥守成政言上よ及びし故、お召の趣承知致した、政所よいお待兼、我ゝへ遠慮よ及ばぬ、早ゝ御前へ通るべしと、赦す詞よ、左樣おら、お赦しなされて下さりませと、詞すくなよ座を立て、其儘御前へ打ち通る、氏直邊りを見廻して、親人兼て太功を討亡し、一天四海を横領せんとてなたの叛逆、邪魔よ成佐ゝ成政をくじらさんと思へ共、猶々首尾よき御前体、此間佐藤剛介よゞ付、うばひ取せた飛龍丸、其場よおいて曲者が奪取立退たれ共、彼さへをくじれゞよいと、詮義ゆるかせよ致す中、劒紛失の事露顯致せし故、定て成政い改易切腹と存の外、相替らず出勤いたすが、一躰マアコリヤと、ふござるな、されゞ〳〵、

此氏政も其落着相待おつたが、飛龍丸紛失の咎閉門と嚴命下りし佐々成政、政所取成有て、餘の詮義百日の日延、は免有て事ゆへなく出勤、夫れ何の事でござる、其上剛介が奪ひ取た、飯沼三平が取持の小柄、寶藏ゑ殘し有べ譬横死の跡でも一類の者へ、咎が參らねべならぬ筈、其義も何のさたなき故、剛介れ敵討を恐れ南都方へ立退ました、彼是する中成政が手ゑ飛龍丸を差上なべ、此方の手立れすつかり、汕斷のふ詮義せずれ成ますまい、イヤ〳〵左樣な廻り遠い思案ゑ手短ゑ仕廻ふて取、手段れ兼て致し置ど、其方れ若年故、万事そゝこしうて役ゑ立ぬ、此間も奪れせた飛龍丸、其場をさらず取るゝうつそり、たしなみふらふと云かられて、いくつゑ成てもてれいれ親、何やらぶつ〳〵つぶやいて、疊ゑのゝ宇書斗、かゝる折からお次ゑ、佐々成政出仕ゑと披露の聲、時刻來ると氏政れ心の笑つぼ押かくし、は前へ通る其跡ゑ、役ゑ立ずと云れし無念さ、何んでも儕

成政めと仕すまし、顔して待ぬたる肥州隈本の大主佐々陸奥守成政、飛龍丸のは咎政所の取成よよつて、は免許かふむるは禮よ越路の名産黒百合をは献上の心當、手づからうつゐたづさへて、そづ〳〵御殿に通り來る、氏直夫と見るかも、成政殿は出仕でござるかと、聲かけられて是い〳〵、氏直殿お早いは出仕、拙者献上の品ござればお先へ參る、は免なされ、アコレ〳〵成政殿、見受ますれば、何やら見事成珍きは献上とござるが、ソリヤ何の花でござるあ、イヤ是い黒百合とヤ者、ナニ黒百合ドレ拜見と見とれ入バテ扨〳〵、是いけしからぬ珍花、何れからお求なされた、イヤ〳〵花の出所いヤさぬが秘密ナセ〳〵さればさ、今日い此殿よ於て、北の政所晴のは茶の湯、は恩を蒙る此成政何をがな献覽とい存ずれども、四海の主として何一つ不足なき身成ば、備ふべき物なく、漸〳〵存付た此黒百合、天が下よ並びなき珍花、先日かは披露ヤ筈なれ共、珍客へ珍花の噂もれざる樣、いろ〳〵心配

仕つた、つぶさよのべる珍花の由來、又此花を差上たら成政がは前沖、よいが上よも上首尾と羨しさと、けたいの悪さ思いず花よ手をかけて、取んとするを拂ひのけ、成政が献上の此花、お手かけられて何とおさる、ず是い、ナニ、は披露ヤさふと存じて、ア、イヤサ天晴のは献上、當時淀町は前い、太功の寵愛深き故、本妻の政所悋氣つよく、何がな手を取そふと思ふてござる所へ、此珍花献上をめさつたら此上もおい上首尾、其お首尾をあやかる樣、此氏直お取次ヤたい、成政殿何卒お首尾あやからして下され、お頼みヤ是さ〳〵と三拜九拜、成政い打笑ひ、左程拙者が首尾は懇望有事おらぺ、お頼みヤさふ、宜敷御披露下されい、何お聞入下さるとな、是い〳〵添い、左樣ならぺお首尾あやかりませふと、氏直い、花筒取持ずんと立、仕てやつたり小點き笑を隱して入よけり、跡見送つて成政い、先休足と手を擲き、陸奥守でござる、誰ぞ茶を所望と呼いれぺ、ハアと答へし女中の聲、暫ら

く有て利休が娘、綾女い行義ゑとやかゑ、茶碗を捧げ差出す、成政手ゑ取、是い〳〵誰かと思へゞ綾女、手前太義と呑終り、當御殿始めての出勤、此成政が吹擧せし其方、政所の御きげんい何と、あなた樣のおかげを持まして、數〳〵めうがないお詞、淀町御前樣へ召れ眞の臺子唐物立等、御指南ゆ上し事迄よふ御存有て、御前樣ゑも今日ゑ御指南致せと有難い御意、私が茶の湯い父利休が常々見るゑ見眞似の口寫し、ほんの猿が人眞似、お恥しうございます、おゑかり有ゞよい樣ゑ、其義い承知致した、併彼是いふ中、御前ゑいお待兼、其方い奥へ、ハイ早く〳〵、ハイといいへどうじ〳〵と、用有そふゑ立兼る、是いゑたりまだ行ぬか、但しい此成政ゑ用事ばし有か、左樣なら早くゆて御前へ早く〳〵とせかれても、思ひい跡ゑ、成政ゑ心有、磯の海山ほど、日比の思ひよい首尾も云いれぬ、戀のかけはしい、腰ゑ用意の緋帛ゑ照添ふ顔の、はゑ紅葉、おはもじながらと差出し、あなた

へのお願ひ。此帛ゑ認めました御添削をと、袖覆ふ綾女が振舞心へず、緋帛取て、打吟じ、忍ぶれど色ゑ出ゑけり我戀い、ものや思ふと人のとふ迄、コリヤコレ童も知た百人首の古歌、此歌を添削とい、扨い戀よと其儘ゑ、緋帛取て投出し、尾籠千万、成政ゑ對しケ樣な義、とゞ云かるい表、志の程過分ゑい存ずれ共、某ゑい奥も有又悴も有、ケ樣な見だら千万な義を致してい、世の人口がふさがれぬ、とくとなつとく致す樣ゑ了聞たけれ共、定めし此前ゑは用有ん、先々行やれと勇士でも情の道い辨へし、道理正しき一言ゑ、なま中な事言出して今更何と詞さへ、涙汲たる其折から、奥は殿方女中の聲〳〵綾女〳〵政所樣が召まする、と呼立られてまだ跡ゑ、心殘れど是非なくも、涙ぬぐふて入跡より俱ゑ續いて成政も、奥へ入体氏政い、窺ひ〳〵立出て落たる緋帛拾ひ取、忍れど色ゑ出ゑけり我戀い、物や思ふと人のとふ迄、よい物が手ゑ入たと、云ゞうを胸ゑ納めた思案、底意

ゝ、後よゞ「ゑられたり

四冊目

綱四海の富貴今爰よあつむる聚樂の北の對、太功の政所ゝには中あき淀町には前、けふ招請のには設、一入晴の茶の湯迚、道具の配り万端よ、心を痛めふゝします　紋　俄のお召何事と綾女ゝ衣紋かひ繕いには前よ出れゞ　綱政所近ふ〳〵と招き寄、けふ請待する淀町には前ゝ、我君第一の愛妾なれゞ、一入晴の茶の湯、殊よ當流の茶道よゝたゞ〳〵　敷自なれゞ色ゝ心をいためしよ、成政か心付よて、其方參りくれたる故、大よ力を得たるぞや、是ゝ是自が、思案を盡した認書、批判を賴と有ければ、紋はつと斗よすり寄て、押戴き押ひらき、ゑとやかよ讀下し、道具の取合せ云ん方なく至極の思召、には料理の中早松簟初茄子、此二色ゝ宜敷からぬ樣よ存まする、當流の茶ゝ只何事のふ、有の儘成を專一といたし、料理も時ならぬ珍敷品

ん忌まするが捉早松簟初茄子とも、珍らかあるを持てはやしんへべ、下さまのは事、此二品ん玄ゆんさいと夕貌の實よ、お仕かへ遊べされますが、則當流の茶よてひと、茶道の奥義さら〳〵、おめず億せずのべたるん頃利休が娘と、綱政所感じ給ひ、つゞまやかなる茶道の批判左程道よたへなる其方、たのもしく思ふ故頼みたき事有力を添るかいかよ綾女、紋勿躰おきお詞、誰有ふ天が下の主同前のは身の上、いかあるゆゑを棲る共綱違背んせぬとん嬉しい、其詞を聞上ん何をかつゝまん、我君を寢取我ん顔する淀町は前、今日の茶の湯を幸ひよ、何をがな手を取せんと思へ共、流行よ疎きわらん、今日ゆ師弟となる其方、自よ力をそへよき手立の有べ遠慮んない、聞まほしと太功を、男よ持たは身でも悋氣ん女のあらひかや、津其手段の珍花一種氏直献上仕らん、とお次の襖荒らかよ、以前の黒百合捧げ出、は前よ直し押下れば、綱政所見やり給ひ、色黒くうる

いしき花おれ共我日の本よい見おれず、綾女い利休が娘おれば、ケ樣な珍花も之りつらめ、紋ふつゝかおがら此花、黑き百合と見極めました、ガ今日のは持なし、是よ增たる品や有ん、父利休茶道よ心を寄、色〳〵の珍花を見受いへど、黑百合の事い露聊噂よも仕らず誠よ此上もあい氏直樣の御献上、ケ樣な花お用ひ有事、專茶道の手柄よいと、津ほめそやされて圖よ乘氏直珍らしいか、イヤ珍らしくなくてたまる物か、凡三千世界廣しといへ共、今一本、類ひない此黑百合、何ぼ淀町は前が秀才でも、此花計よや手を取れよやならぬ、何ときよといい物か、どふだ〳〵ふゝゝゝと自慢たら〳〵、人の手柄を我物よ仕たり顏こそ頗憎し、紋といえらずして成政い、おくれては前よ罷出、氏直殿先刻の品宜しくは披露下されたか、津貴殿い成政殿、拙者よ披露とい何を披露　紋　黑百合の義でござるは披露下されたか、津いかよも披露仕つた所けしからぬ珍花とは意よ叶ひ、氏

直甚だ面目を施しましたてや、紋夫い有難き仕合餘り珍らしき花故返つてはきげんの程を計兼ました、貴殿のは取成で首尾殘る方もなく千万忝ふ存る津ァ、是〳〵成政ソリヤ何のたい事だ、氏直が献上の黒百合披露したかと問ふやる故、いかよも披露仕つたといへば、は取成で首尾殘る方ないとゝふでござる、エ、コリヤ何だな、此氏直珍花を献上しては賞美よ預るか羨しさよ云かけして手柄を奪ふ出來心か、紋ヤ、何と津イヤサ氏直が上首尾が羨しいか、コレ横道者めと、紋云れてぎよつとし、氏直貴殿い氣が違つたか狂氣ばしせられたか、津何を馬鹿な氏直氣が違つてたまる物か、紋夫よ成政が献上の黒百合其方が献上といな、津だまれ成政、左樣ゝ後ぐらひ氏直でない此黒百合い某が献上、紋イヤソリヤ非道先刻鶴の間よりいて此珍花取次さしくれよと津イヤ知ぬ覺へいない、紋覺へないとい横道者、達て非道を言募ると其座い立せぬ眞二ッと、齒がみをなして結寄

ゞ津氏直も居大高〳〵と二人双方が樂ひよ角め忽よ既よ斯よと見へたる所よ彖北條氏政つと出、兩人御前成ぞ尾籠へと押鎭、其身ゝ座席よ押直り、分明ならざる献上の爭ひ政所のゝ堅慮いかゞ、綱花ゝ一本主ゝ兩人、氏直よもせよ成政よもせよ、慥よ花の主といふ證跡を出させたがよかろう、彖尤のゝ堅慮誠よ古今よ見聞せぬ珍花、定めて花の出所有べし、何れの地何れの產と、分明よゆが潔白津、コレ〳〵親人ソリヤ悪い〳〵彖イヤヤ地からはへた花だ物出所がなくて詰る物かい津サ其出所ゝ云れて有ぞ云ぬが秘密夫をいふてゝ此氏直が負ぞやよつて云ぬが秘密コレ〳〵と袖の下、拜んで見せる氏直がじり〳〵舞〳〵こんずの汗流しかけるぞ心地よき、紋成政ゝ謹で花の出所を明白よゆ上るが證跡とゝ尤のゝ裁斷サヽ、氏直出所ゝどふじや、津ナ夫ゝ紋ヽヽ、成政がゆさぬ秘密よもや答へゝ出來まい〳〵此黑百合ゝ成政が舊領越中の國大女山の北千蛇が池の名

産、淀町は前を請待の晴々敷は茶の湯何をがな献覽せんと早走の飛脚を以て、大竹よ寒水をたゝへ取寄ひと、つまびらかなる言上よ 粂氏政氏直をはつたとねめ付、武士たる者の有まじき、人の手柄を羨み横取せんとゝ尾籠の振舞、は前よゝ相叶ゝぬ立〳〵 綱アヽコレ〳〵氏政事明白よ分る上ゝ此後をたしなまずが肝要、夫ゝ共有今日の客へ、何をがなと思ふ折から、利休さへ来らぬといふ奇代の珍花與へし事、悦びゝいか計、此花を持て嫉しい、淀町は前よ手を取さゞ自が本望此上おし、併茶の湯終る迄ゝ、必此事さたせぬ樣綾女も此方よ留り、万事の差圖よきよ頼むとつと〳〵よ、は下知有て政所其儘は座を立給へゞ 紋成政綾女も隨ひて帳臺へ入給ふ 津跡よ氏直詰寄て、親人成政めが鼻ひしいでくれんと、横取仕かけた黒百合非を理よ曲て 粂何を馬鹿者、うぬが思案ゝ安大小、跡からはげると知ぬうつそり、アヽ花を献上さずが、氏政が思案の奥の手、見せてくれ

んと見廻し〳〵、白洲よりおり立、取出す笛、音よさそいるゝ小男鹿ならで津は殿の下から眞黑出立、皆一樣よ狹箱、用意の珍花は用かゝ糸コリヤと押へて叫けゞ津面々傳へて一同よかしこをさして忍び行、跡よきよろ〳〵氏直い、親人用意の珍花とい何の花糸成政よ鼻明さんと、狹箱よ仕込取寄たい千蛇が池よ花咲黑百合津何やらどき〳〵とんと分らぬ、百里よ余る北國から、成政が取寄たいけふの事、どふして又こつちよい、糸されゞ〳〵、飛龍丸紛失の咎め、政所の取なしを持て赦れたる成政、生置てい後日の妨、手短よ討取らんと六日以前の夜半よ紛れ、彼が館よ忍びを入聞取たる珍花の密事、究竟の計策なれば、此方も其夜よ同じく飛脚を仕立、早走りを以て取寄たる數多の黑百合、芥のごとく諸人よ與へ、澤山なる物と吹聽させ、其上人を以て淀町は前へ、百合の出所ゆ通させ、手を取さんと斗る、政所よ聚くいし、此事も成政が業ゝと云ふらさゞ、首尾いさ

ん〳〵其所へ付込、飛龍丸紛失を云立あゞ佐々の、滅亡目のあたり、津イヤ
親人ハ親人だけ、計略ゴ實が有て面白い、黒百合の手、番ひ、淀町は前へ内
通ハ此氏直、桑イヤ夫ゴ、遣ふハ利休が娘、淀町は前ゴ對面さゝば、政所ゴ手
立有んかと尋ねさぐるハ云れた事、津シテ其手段ハ、桑コリヤこふ〳〵と耳ゴ
口咀きうなづく其折から、淀町は前のは入と、云つゞ聲ゴ目くゞせし、云
めし合して奥と口別れて入や内「入白髪山の住居も只ならぬ、聚樂の亭
の奥庭ゴ、美花の嵐を踏ちらし、逃來る綾女を、氏直が、大手をひろげて追
廻せゞ、越楓をくゞり山吹を、廻る子供の隱れん坊、形も所体もしとげな
し、美息もヒイ〳〵氏直ハ、とふやらこふやら帶のはし内引留られて、ア詞ア悪
い事お赦しなされて、美詞どつこい〳〵悪さでハない、よい事を敎へてや
るのさ、氏直とも有ふ者頼ゞたぴつゝやりよふ逃たな、越夫でもわなた
のお役目ハ、行義作法をお紀しの、お家柄ゴも似合ませぬ御無躰、美イヤ無

躰でんない尋常ゑ應といや、氏直樣の御簾中、忽浮み上る事いやでん有まい、ヤアどふじや、〳〵と抱付吸付蛇が見付し巣立のひよこ、越又振切て逃出す綾女美目ゑ角立て氏直が追行向へ、内淀町御前、打かけも唐織の、錦を鍬る御粧ひ、お女中數多召連られゑづ〳〵として入給へば、越綾女ん逃るゑ逃られおはつと平伏おしゑける、内淀町御前見やり給ひ、其方ん利休が娘綾女、今日ん政所ゑ召れ此殿ゑ逗留と聞及んだが、自への出迎ひか太義〳〵、越ハッ御前ゑもにきげんよふ入せられまして、いか斗おめでたふ存じまする、先々あれへ　内イヤ綾女、此所で其方ゑ目もじせしん幸の事ちと尋たき子細有、近ふ〳〵、女共暫らくあれへ　越はつと一同ゑ女中連、かしこへこそんゑりぞきぬ　内邊り窺ひ淀町御前、綾女ゑ向ひ聲ひそめ、其方んわらんが茶道の師匠なれば、年こそ違へ此淀町ん、そちが爲ゑん子も同然、此身の大事ゑ及ぶ事、よも隠しんゑやるまいの、越是ん

〳〵勿躰ないは詞、平生は恩を蒙りまする私、は前の大事よ及ぶ事何しよお包ヤませふ、内包ぬとい先嬉しい、そんあら問ふ、政所自をけふ請待の茶の湯よい、手を取せんと思召お巧が有ふがの、越内エ、サア其方ならで何者か我を憐み告くれん、は手立の有増、語れ聞んと黒星を、越遠の秀才驚きしが、は口留のお頼を、無下よいならじと何のマア、左様なは工しいん、内イヤ〳〵夫い偽り、定て政所ゟ自よ噂なしそとは口留有しならん、は本妻の政所い、四海の政務儘なれば、諸大名こびへつらい、は威勢い朝日のごとく、又自事いは寵愛い蒙れ共、妾の身なれば光もうすく、今よもせよ太功は他界有ば、日比の嫉恨よて、いかなるうきめよ逢ふやら、闇路よ近きはかなき此身、便あい自を救ふが人の誠ぞや、頼よ思ふいそち計、情をかけてくれ〳〵も、身をかこちたるくやみ言越はいたいしさも、先立涙漸よせきとゞめ、勿躰ない私風情、お頼なくと打明て、ヤさよやならぬ日比の

に恩、一旦に前を偽りしゝ、政所のに口留故、今日のお設ゝ世ゝ類ひなき黒百合一種、に手を取せんに計略内ゝ黒百合ゝ何れの產越越中の國大女山の北、千蛇が池の名產内ゝよい行きやれ越ゝ別れてこそゝ「行空の、星ときらめく銀燭の花ゝ暎じる北の對、政所のに殿ゝゝ、淀町に前を設の茶の湯和漢の、名器集たる詫た風雅ゝ上樣も、規矩ゝ違ゝぬ柄杓の運び、巾紗捌も上流の手前、優く見へゝけり、中立も過後入ゝゝ、兼て手段の黒百合を白銀の花入ゝ手際涼しく、生たる風情、淀町に前ゝ扨てそと、思ふ氣色をゝほやかゝ、今日のに馳走冥加あいとゆそふか、お妾の私ゝ誰有ふに本妻の政所樣のお手前、お心盡しの數々取分お花ゝ珍敷黒百合、白銀の器のお取合と申、生方のに風流ゝ、此淀町ゝ手を取そふと、思し召お心入、花の色香ゝ見へ透ました、ホヽヽ、淀町樣の悪ぎやれな、當時我君太功樣のに寵愛ゝ、誰有て並ぶ方なきに秀才、本妻といふゝ名斗で、獨り寐

ざめの閨の中、涙よ明す愚なわらいか、譬お手を取そふとどの樣よ心を盡したとて何の甲斐及ぶもので、及ばぬ事いえりながら、盲蛇よおぢずとやら、けふの茶の湯の泡馳走い、黑百合一種の心當、花の素性を淀町が、存有やのお心がけ、申て見よふか、受給いらふか、サアサア〳〵何と、越路なる千蛇が池よ、咲と聞、百合いあやなき烏羽玉の闇、、都の者の見る事堅き北國の珍花、愚な此身いえるまいかと、泡馳走のめど違ひ、お心盡しも水の泡、、、嘸悔しうでざりませう、政所樣、お禮い重ておさらばと、詞の針を襦捌き、心殘して えづ〳〵と、廊下をさして出給ふ、鵲の背と喰違ふ、花の手立よ政所、跡打見やりほいなげよ、佐〻成政が献上の黑百合、類ひもない珍花よて、事馴たる利休さへ、えらぬといふを頼つ設し手立い浦嶋が、明て悔しき後入の花、よもや素性いえるまじと、思ひの外一首の歌よ、越路よ咲る名産と答へし上よ、此方から手を取せん手立迄、見透されしい

口惜や、そも何者が内通して、かゝる恥辱を與へしぞや、思へば〳〵女程世ゝ淺ましい物はない、四海の主と敬れ綾や錦の榮耀も、前垂がけの轉寢ゝ、夫婦の契りかはしまの、水もらさぬと契りゝし、やつぱり昔が忍ばれしい、因果な立身出世して、淀町殿ゝ見替られ今では素守同前ゝ、うつろふ君のお心が、わしや嫉しい悲しいと、儘ならぬ世のかてち言身を、裏菊の乱れ咲雨ゝ打るゝ風情あり、始終後ゝ窺ふ氏政、物影ゝつゝと出、其内通の張本ゝ、佐々陸奥守成政といふ顔急度打守り、其方ゝ氏政、花の大事を内通せしゝ成政が斗ひとなゝいかゝも淀町御前ゝ、當時太功の寵愛深く、日々ゝ威勢盛ん成故、成政密ゝ心を通し、世ゝ澤山なる黒百合珍花成と披露し献上なし、此事彼が密通なす利休が綾女を以て内通させ、政所ゝ恥辱を與へ、威勢を落さん彼が工ゝ成政ゝ自が腹心、我ゝ乃向ひ捕れと成、一旦家國ゝ放れし身ゝ、肥後一國を中與へ、其上飛龍丸紛失の咎

を定、百日の日延願ひやりたるわらいが恩義、仇で報いん樣がない、イヤ夫がうつかり大切成黑百合數多を分ち諸人よ與へしが、こなたを憲一ッの手立其證跡に覽よ入んと、ずつと立寄書院の障子、引明れべていいかよ、さも大形成花籠よ用捨おくも黑百合を、小山のごとく生捨たり、はつと驚き見給ふ中こなたの廊下を太功の御前へ、通ふ女中連、皆一樣よ、黑百合を頭よかざし過行有樣、見る度々よ政所、胸打騷ぎ〳〵、ヤア〳〵われも黑百合、是も黑百合、必得ぬ百里よ遠き越路か、翅有迚、けふの日よ外か取得ん樣いおし、扱い成政世よ多く持扱ふを、珍花おりとわらいを歎限りなき恥辱を與へしよなと、始て心月の顏、曇に目よばら〳〵と血汐を泗ぐ、に怒り、氏政い舌なめずり、えてやつたりと聲高く、ヤア〳〵者共、政所のに不審有佐々成政を生捕と、傳ふ下知よかしこか、ことじさす又えの潔き我組留んと組子の多勢、追取まくを事共せず、覺へなき身のヤ譯、に

前でせんと右左かゝるを拂ふ手練の成政、蝶鳥なんどのごとくよて烈き振舞組子共、叶ハじと逃て行、氏政いらつて、ヤア政所方には不審有尋常よ繩かゝれ、イヤ忠義一圖の陸奥守、には不審蒙る覺ハない、シテお咎の趣ハ芥のごとき黒百合珍花成と僞り献上おし、其方よ心を通ハす綾女を以て、淀町には前へ内通の密事、一々露顯致し有ハい、心得ぬは疑ひ、飛龍丸紛失の誤り、ヤ下給ハる政所のは厚恩、何をがな報し奉んと、舊領越中方取寄たる奇代の珍花、芥の如き花成とハ、ムウ其珍花が何故よ、テレアノごとく澤山よ花籠よハ差捨有ごと、聞て恂りつか〳〵、とは書院を見上れば、誰おす業か數多の黒百合、さもすさまじく見へければ、こハ〳〵いかよと成政ハ動轉えたる計ゑ政所は氣色損し、是迄恩義を與へし我よ、何恨有て斯斗、ゆゆしき恥辱ハ與へしぞ、預の飛龍丸紛失とハ僞り、誠ハ淀町には前へ献上せしとハ、此氏政がよらんで置た、剰花の素性ハ千蛇が池と、其方よ心を

通ハす綾女を以て、内通させたで有ふがなと、以の外のに氣色よ、成政大きよ恐れ入、全く以て其義斗ハ、〳〵綾女と其方ふ義の證據ハ此緋巾紗、云譯ハ成まい〳〵、〳〵〳〵 駒方人是へと氏政が詞の下ゟ氏直ハ、綾女が首筋鷲掴み、何の用捨も引立出、成政よ心を通ハす同類の女め、白狀ひろげと突放せバ綾女ハ有よも有れぬ思ひ、懷劍拔持我と我咽よがハと突立る、成政ハ欠寄て、綾女、某が身よ取て覺なきに不審、其方生害よ及んでハ、虛名の晴る時節がないハい、其云譯の種よも、と捨る命ハ跡先を、辨もおき誤りゆへ、四海の主のに前樣、に指南ヤ冥加なさ、身の愼しみを忘れしもに本妻有わなたを見染、及ぺぬ戀よ身を盡し奥樣なくぺ我戀の、叶ふ時節も有ふ物と、はかなひ思ひをする折から、淀町樣も諸共よ、に本妻故儘ならぬ、世をかこちたるに賴み、我身のうさよたくらべてついいたハしうかく〳〵と、一大事をヤせしゆへ、かゝる騷動發ゟ初、成政樣の科と

成證據と成た緋市紗い、私が方から仕かけた徒、あなたいは存ない事なれば憎いやつじやと思すから、私を此儘づだ〳〵ょ刻で成と成敗して成政樣のお咎を、お赦しなされて下さりすせ、は前樣、氏政樣、氏直樣お取なしをと手を合せ、拜んで廻る四苦八苦、死る今端も戀故よ、つくすうきぎ身ぞ哀なる、氏政いはつたとねめ付、はてくらしい女め、命を捨てる緣者の證據ナ譯よいならぬ〳〵、飛龍丸の行端珍花の僞り、內通のナ譯成政とふじや、夫い、言譯有かと氏政親子俱よ詰寄絕躰絕命、手負いア〳〵成政い、日比よ照す忠臣の鑑も曇身の虛名、正敷譏者の業なりと、心い付ど言開かん證據有ねば齒ぎりをかみ、弓矢神よも神明よも、見放されしかチエ、口惜や無念やと日月歎両眼ゐこぼす涙い水晶の玉吹散すごとくに、言譯なんとせんか、既よこうよと見へたる折から、ア〳〵成政暫し〳〵太功ゐのは上意有と、立出る桐柾壹岐守、頭よ戴く嚴命よ、各はつと敬へ

ば、中央よりむんずと座し、今日の一乱さがなき女義の爭ひを起るといへ共、成政献上の黒百合よりて騒動より及びし事、不届ゝとは怒り是有所、折節筒井順慶は前より有て、成政が英雄を惜み、落去の間ゆ預らんと達て、願ひ奉れ共筒井が娘ゝ陸奥守が内室なれば、聟舅のよしみ所縁の願ひは聞届是なき故、順慶我娘を勘當なし親子の縁を立切上、身の誤りよせんひをくひ、命を捨たる綾女が願ひ、神妙ゝとは感の餘り、佐々成政ゝ此場を筒井順慶へは預なさるゝぞと聞ゐ綾女ゝはい寄て、私が命を捨た故、成政樣ゝお預とや、ゝ有がたいと伏拜、心ゆるめばがつくりと、嵐より向ふ初櫻ちりて、はかなく成ければ不便と見やる柾桐成政、政所ゝは聲くもり、わらゝがよしなひ悔氣よりかゝる騒動起り初、さがない女の爭ひとはさげしみを蒙る上、成政といふ國取を、損のみか綾女迄不便の最期させつる事面目ないやら恥かしい、是を此身の菩提として、浮世の色香ゝ淀町

殿へ譲りて我いさまをかへ、大德寺の方丈のは弟子と成て東山よ引こもり、法の灯火照さんと黑髮ふつつとは身のざんげ、法號則高臺院と替らせ給ふは姿、成政はつと恐れ入、重恩報ひ奉らんと、心を盡せし黑百合が却て法の導と成行給ふも是全く、陸奥守が身の誤り、ヤ上べき詞なしと後悔涙身を震し、歎くを制して高臺院、ヤヤ成政其後悔い斷ながら、黑百合の因よつてわらいが菩提の道よ入も、色則是空の皆因緣からる騷動工たる、其惡人も我胸よ、當れど夫も此儘よ、咎ぬい善惡一よよ、そちよ恨もさら〳〵なし、柾桐よきよ我君を、ヤ宥て、飛龍丸、日延の内よ差上なば、成政が本領安堵、吹擧致して得さすべし、さらば〳〵と明德の、智眼よ見開く出離の門、いたいしさよと女中達皆一同よ髻拂ひ、は跡慕ふ菩提の門出、柾桐暫しと聲をかけ、花有は身を思し切は遁世まします事、、、勿躰なしとい云ながら、留る共中〳〵よ見返り給ふは氣色有まじ、せめ

てゐは身の營よ太功へ言上おし、東山の片邊りよ、一宇を寄付し奉らんと、忠臣無二の龍元が詞ゐ正よ咲匂ふ、花の都の東山、古跡を殘す礎の、其名も、高き臺の寺の因緣、殘して「いで給ふ

五冊目

浪速堀江よ名よ高き、筒井順慶が館よゐ黒百合の騷動ゑ、佐々成政を預れば物事質素よ物さびし、庭の樹木を木造りが松の葉先を木挾で、挾をぞめく腰元中座敷の除掃うゐの空、何れ女中ゐえどけなし、順慶が妻の八重梅、家來林丹藏を引連、座敷を見廻り立出て女共掃除ゐよいか、此度夫順慶都ゑのお召ゐ、此方へ預る成政殿の落着、は上使お入の程も知ねば、言付た館の掃除、隨分共麁略のおい樣、早ふ〳〵と追立やり、丹藏、木造りゐ順慶殿のお氣よ入、留主の中も留め置よとの云付、最前歸つた家來が、壹後よゐは歸館といふたが、大躰お歸り迄よ片付か、尋て見やと

有ければ、はつと丹藏梢ゑ向ひ、木造り、追付殿のお歸り早く仕舞てお庭の掃除仕れ、今暫らく間も有れば、木ぶりの見苦しうない樣、そなたの踏へていやる枝ぶりが悪い右の方へため直さや、此枝でござりますかと足先で敎へるを、見るゑ丹藏刀提、庭へひらりと飛でおり、ゑつくい下郎め、奥樣のゐ意を脚で敎る慮外者め、是れへおりよ〳〵、眞二ツと、鍔元くつろげつゝ立れば、木造りハット驚きあわてふためき飛でおり、ヤ々枝を便ゑ致すゆへ思へずゐ無禮、ゐ免なされて下さりませと頭を下て詫ければ、いか樣梢へ上つて慮外もかへり見ざる筈、殊ゑ夫順慶殿心を付て取せいとおつさやつた者なれば、赦してやまや、奥樣の御意下らずばぶち放し、捨ん物命冥加な木造りめ、ソレお庭中が木の葉だらけで見苦しい、早く掃除仕れと、さかり飛され木造りハうろたへ廻つて掃うちゑ先お入と丹藏ハ、奥方伴ひ入ゑけり、一時三里犬走り飛脚が

黒汗黒股引狀箱かたげて走り込、頼ませう〳〵とつこふどよ、呼んる壁
よ木造りが、エヽやかましい何者じや、イヤおらん是の主順慶樣へ、内用の狀
を持て來た者だ、イヤ殿樣ん御上京で留守じや〳〵、お腰元衆呼でやろ、お
腰元衆〳〵是ん云たり返事せぬん、エヽ又部屋へ這入て鼈甲かな遣てゐ
ると見へるよいん、置ていあんせ。おれが取次でやろ、是ん太義だ。そんならお
身を頼ん、コリヤ太切のお用だぞ、鹿末よすなと狀箱渡し、飛脚ん いこかん木
造りん、かしこへこそん別れ行、ろくや苑よ行なやむ、あ云ゆく夫人の身
のうきよ、思ひん同し身のうさや佐々陸奥守成政が、妻の操ん都が夫を
慕ひ子を思ふ心ん強く氣弱く、馴れぬ旅路よ身んやつれつく杖さへも
たよ〳〵と、心難波の、親里近くたどりしが、遙向ふを打見やり、コレ政千代
向ふよ見へるアノ松ん、祖父樣順慶樣のお屋敷、サアちやつとあれへいて、お
とゝ樣よ逢すぞや、アイ嬉しい〳〵、サア早ふと悦ふ我子を力草たどる屋敷

の表門、嬉しや爰と其儘よ、入んとせしが待えばし、身ハ義理故よ勘當の、
掟破つて若や又、夫よ難義重ならぱいかゞハせんと案し詫、心たゆとふ
其所へ折よく出てくる腰元共、操ハ夫と飛立て、そち達ハ政野小雪ぢ
やないかいのふ、そふかつえやるハ操樣かと欠出て、こちへと伴ひ
入、ヤア操樣、あなたのお里へ何ぼ遠慮、どふしてお通りなされませぬ、そ
して見ゑや和子樣計、お供もなしよかる〳〵えう、お出有しハ何故と、と
ふを小雪が打消て、政野何いやる、お尋ヤさいでもえれた事、舅君の
成政樣、何やら六ケ敷お咎で、こちの屋敷へお預けなれぱ、お見舞よハお
出なされたのじやないかいのふ、ヤアヤと問れてつらさ身の上を、語るも
涙の種、ふがら、わえや父上方ぼ勘當の身じやハいのふ、ソリヤアどふしてど
うしてと尋る兩人押鎮、其譯といふハ我夫成政樣、献上の黒百合騒動の
砌父上順慶樣太功のぼ前よ有合せ、落着の間ヤ預らんと、ぼ願ひ有しかど、

聟舅のよしみ有ゆへ、ゐ聞届なかりしよより、自を勘當おし聟舅のよしみを斷、ひたすら願ひ給ふ折ふし、我夫よ心をかけし、利休が娘綾女生害よ及びし故、瀧公のゐ心和ぎ、父上へ預と成、其成行を悦んだ日のべの日數も早立てつゞまるゐ身の落着、父上を都ゑお召と聞て案じられ、閉門と成身成ども、舘を拔出此子を連、うき目を凌いで來たりしも、其落着が聞たさ故、賢い父上なれゞお去かり有ハ去れた事、どふぞ密よ母様へお願ヤくれ〳〵も、涙よつらき身の上を聞て一同よ打去ほれ、ほんよ浮世の掟迚何誤りもないゐ身が、ゐ勘當といおいたハしや、ゐ小雪、そふ共そふ共、殿様ハ幸お留主、此間よ早ふ奥様へそふじや〳〵と立上る其所へ、ゐ歸舘ゑと先走エ、折悪い殿のお歸り、首尾見合て私共がよい様よ斗ひませふ、暫らく部屋へと深切よ心扱ふ腰元が、情を親子、が隱れ家と打連てこそ入よける、山鳥のおりの鑑ハ隔つれど、思ひハ通ふ操の方夫の落

去聞かも、心の重き飛石傷ひ我子を抱窺ひ寄、こなたの襖押明て、館の主筒井順慶をづ〳〵と打通れば、奥方八重梅出向ひ、遠路のに出仕に苦勞よ存まする、定て此度のに召の此方の屋敷よ預る、佐〻成政殿の落着あらん、黒百合の誤りの法身有し、政所かに願ひよて相濟、飛龍丸百日のゆうよも、けふよつゞまる其日延今よおいて有所もそれねば重きお咎有んかと、案じるも娘よつあがる聟殿の身の上、善惡二つの落着をと、すり寄奥方、こりゃ〳〵八重梅何を云、聟との誰事、娘との何者、黒百合騒動の場よて娘を勘當成預り歸る佐〻成政、只今よての聟舅のよしみも親子の縁も斷切て有のい、他人の落着、女の差出る事でのない、扣てゐやれ夫じやと申て、くど〳〵とうろたへ者めと云かられて、返す詞も涙汲女心のやりはなき主の歸館と聞かもこあたの間押開く佐〻成政の籠鳥の、雲井を乞ふ籠居の身、積鬱あらん是へと、主が赦しよ一間を出、都か貴殿

のお召ゝ某が身の落着、黒百合の過有上、飛龍丸のは劔今日迄もえれざれば切腹ゝ覺期の前定めて左樣の嚴命ならんと、尋ゑ順慶ゑつこと笑み遠ゝ成政天晴の覺期、此順慶へ渡しゝ預置たる陸奥守黒百合の一件、重き咎ヲ付べき筈なれ共高臺院法身の砌、願ひ有べは用捨有て、飛龍丸の詮義、百日の猶豫聞届置といへ共、今ゑおいて差上ざる段不届至極ゑ付、今日成の上刻、切腹ヲ付べしとの嚴命ゑ、と聞ゑたへ兼庭の面がゝと轉込操の前順慶見るゑひらゑと飛おり用捨なく、外面へ突出し栞戸をはたと、立切親子の關げゑ斯こそと成政が、立上るもすそゑすがり、コレ〳〵ヲ折角尋て來た物をと留める母の氣扱ひ、操ゝせゝしく表の戸、打叩き打叩き、ヲ父上お氣强ひ、ナセ此戸を明て下されぬ、夫の命もけふ限り夫婦ゝ二世といふからゝ私ゝ未來で逢れふが一世の緣の此政千代、せめてゝとつくり暇乞さしてやりたい爰明て、明て〳〵と身をあせれば、可愛そ

ふよわしが明てやるいいのと、行母親を成政があふむかへしよゑつかりと、柵恩愛妹脊のかせ、順慶い聲あらゝげ、當春聚樂のに殿よおいて成政献上の黒百合騒動の砌、此順慶參り合ヤ預らんとに願ヤせしかど、イヤ其方が娘成政が妻女なれバ聳勇のよしみ、其所縁有者の願とに聞屈是なきゆへ是非おく其方を勘當成親子の縁を斷切たる折節、利休が娘綾女生害よ及し故、御心和き成政い此順慶へ預と成趣、其砌ヤ聞し、音信不通よ成たる其方塲所がらをも辨へず、未練よも其身斗か、くいんせもおい物を引連、さまよひ來るうろたへ者めと四海の掟利法權、立るい武士の表の梁戸、隔られたる操の前、力涙よくれながら、おつゑやる通り殿樣をお預り有其爲よ音信不通の御勘當、わたゑやよふ辨へておりますれど、可愛そふよ此政千代壹い、ひねもす夜もすがら、ついうたゝねの寐ざめよもおとゝ樣いどこよぞお顔が見たい逢してと、泣て斗りゐるを見て

いぢらしいやら悲しいやら何をいふてるぐわんせない此子よ、よし〳〵我夫の、お顔を見せて得心を、さしてやりたさはる〳〵と連れて下りしかひもなふ、けふを限りの夫の命、お腹召すを何のこゝ見よくる妻子が有物かと我子をひしと抱きめ身もうく斗歎きしが、八重梅ハ有よも有れず、ヲヲ、尤じやいノウ〳〵、順慶殿成政樣、今のをお聞なされたか、政千代が心根娘が歎き、可愛と云ふか不便なと云ふか、アノ歎きを思ひやり、親子夫婦の名乘合赦してやつてと手を合せ、あなたこなたをかきくどき、歎く眞身の血の涙、外よハ力なく〳〵も我子を引寄コレ政千代、ヲヲしハ勘當の身の上なれば、どの樣よ願ふてもお聞入ない祖父樣へシレちやつとお願ヲヱやいのと突やれバ政千代ハ、コレヲ祖父樣とふぞと〻樣のお顔を見せて下され頼みまする、拜みまするとと泣々も、手を合せたるいぢらしさたまり兼て母娘わつと計よ取亂せバ、俱よせきくる涙をバ、順慶ハ成政よ聡、

成政ハ又順慶ヨ、恥てこたゆる胸の闇、鳴蟬かも中〳〵ヨ鳴ぬ螢ぞ哀ゝ、順慶ハ耳待て、鳴ハ〳〵、父戀し〳〵と、鳴ハ箕の虫恩愛の、哀を去らぬきり〳〵す、思ひ切とハ無理あらん、そふ思召ならば、アノ虫共、とふぞ親子の暇乞を、いかさま、かげろうの、あしたを待ぬ今宵の別れ、人ならば赦されねど、アノ虫ヨさのみの咎も有まい、花檀へ殘らず、放してやりやれと詞殘して順慶ハ涙、くろめヨ入ヨけり、としや遲しと八重梅ハ庭ヨ欠ぬり戸を開けば、親子諸共欠入て、ソウとゝ樣我夫と、右と左ヨ去がみ付、嬉しさ悲しさ一同ヨわつと計ヨ泣ければ、早告渡る、入相ハ既ヨ近付身の血死期最期の支度と成政ハ、すがる妻子を押退突退入一間、待て〳〵と留る操、今ハかいなき稚子の泣をいさめて八重梅ハ親子を伴ひ入折から、庭の木草をふみちらし迯來る木造り透間もなく、追來る丹藏爰かして追詰〳〵振上る、刀の下ヨ身をちゞめ、ヤ〳〵あたどめつそふあ譯も言ず、用が

有と待して置て、殺ふといかとう欲、何をぐど〳〵細言云ずと夫へ直れ、イヱ〳〵めつたゑ直りますまい、女房子もございますれば、死だ跡で嘸ろとうゑ立をろかと、夫が不便ゑでございます、一人ならず親子三人の命、どふぞお助け〳〵と、泣詫るこそ道理なり、丹藏暫らくと、押留めて順慶立出、木造りゑ打向ひ、仔細も予聞さず、其方が命理ふじんゑ取んといふ、其子細い、此順慶が予預る佐々成政劔紛失の予譯立ず、切腹の嚴命下る事とつくなさつしたる故、一旦身替りを以て事を納、時節を待て太功のぼ怒りを予宥んと、色ゑ心を扱ふ折節、屋敷へ來たる其方が面ざし、成政ゑ似たる其方が不運、宿緣とあきらめ、命い我ゑ得させよ、と事を分たる順慶が、詞も馬の耳ゑ風、何やら六ケ敷そふな事の樣ゑ存ますが、私も命斗りいちつと入用ゑでございます、此お頼みい返上まひ致します、うか〳〵してゐたら、どんなめゑ逢ふも知れぬ、おとろしや〳〵と、つぶやき〳〵

立上るを、夫とゞめよと順慶が、下知か早く切込刀、かいくゞつて逃行を又もぼつゝめ切付る、刀ひらゑと丹藏を、池の汀へ切込たり、驚く順慶忽ち、池中うなつて逆卷水勢、障子をさつと佐々成政、庭前急度打守り、心得ぬ、丹藏が血汐、此池水よそゝぐと等しく、忽千草枯えほれ、水卷上つて、えんどうするゝ、石よ精有水よ音有、扨こそ尋る飛龍丸の有家、此水庭よて有けるか、ヤア〳〵飯沼三平が弟勝五郎、ぼ太刀を早くと明察の、詞よ、と立寄木造、夫やつてゝと順慶が、柄よ手をかけ欠寄を、遮ぎる成政鉦太鼓何國共なく、動搖せゞ、順慶いぶかり、ア、貝鉦ゝ、イヤおさゝぎ有な順慶老、眞柴家よ逆意を含筒井入道順慶を、召捕ん手配りさ、イヤ此順慶反逆の覺ゝない、イヤ其證據ゝ此飯沼、兄三平が無念の横死、敵討の願ひを立れど拜領の小柄證據と成、飛龍丸盜賊の疑ひかゝり、出立ならざる心外さ、柾桐公へお願ひ申木造りと成て入込館の樣子、窺ひ見れゞ、忍び〳〵よ軍馬

の調練遁れぬ證據ゝ此一通、開き見れば明智が殘黨汝へ送る此密書、最前我手ゑ入たるが、汝が亡ぶる時節到來、又此成政、佐劔此所ゑ鎮座有と云つたるゝ劔氣自然と貫く空中、去ゑよつて柾桐龍元と云合せ、預けと成しゝ汝が討手、如く數万ゑて取圍ば最早遁れぬ網代の魚、無道の天罰思ひ知れと、飯沼諸共詰寄ば順慶が反逆無道とゝ舌長し、不義の榮花を好まぬ子細、語つて聞んよつく聞、いで其比ゝ天正十年水無月上旬、都本能寺の騷動と聞と等しく、眞柴久吉一騎かけゑて馳登り、山崎ゑおいて光秀と對軍おす、四海分めのはれ軍、眞柴ゑ加ふる面々ゝ小田の三男神部春孝、濃州大垣の城主池澤の一等江州宇佐山の城主惟角長秀、其外中川高山おんど、諸國の勇士雲霞の如く、久吉の陣ゑ馳集る此順慶光秀ゑ元ゟ斷金のまじゝり有ば、明智方ゑ味方して、洞が峠ゑ陣を取、合戰始らば、眞柴が大軍切崩んと、手配り定る、其折から、光秀密ゑ立越て、天

王山の勝地をば早敵の手よ奪れたれば、此軍必理有ず、我敗軍の色見へなば、貴殿直樣裏切し、時を待久吉を討取て、明智が無念晴しくれよと余義なき頼み、扨こそ備へを兩段よ立たる故、二股武士と世の嘲けり、八のそしりを余所よ見て、年來ゑとむ我大望、飛龍丸を奪取、諸國の勇士味方よ靡ん我計略、是ゑ叛反の旗上して猿冠者が素からべ引拔、明智の塚よ手向くれんとちつ共たゆまぬ氣丈の老武者、世よ日和見の順慶と、仇名を取しゝ此いゝれ、古今よ秀し勇士ゑ、勝五郎から〳〵と打笑ひ、其方ごときのへろ〳〵武士よ、太功直よは發駕とゝ勿躰なし、左程よ見參なし度ゝ某が生捕て、首よして實檢よ備へてくれんと詰寄べ、成政暫しと押とゞめ、順慶を召捕勇士究竟の捕手外よ有、ヤア〳〵政千代參れと呼ゝれば、ハア、と答へて政千代がりゝしき取なり武者出立、操も引添立出れば、八重梅も轉び出、順慶殿、光秀殿よ頼れた武門の意地を立通す、日比の氣

質と云ながら、何れを何れと分難き、血筋よからむ歟味方、中よ立身の悲しさを思ひやつて逆意をとまり、命まつとふヤと、操も俱よかきくとけゞ、順慶ゝはつたとねめ付、光秀が頼み有ずんゞ、山崎よて心よく討死し、武名を末世よ殘さんよ、義よつて物笑ひと成、今又具柴よ降參し、何生恥をさらさんや、久吉が首見るか順慶が首渡すか、二つ一つの身の落着、女童のえる事ならず、其廣言此成政がひしいで見せう、政千代、云い聞した叛反の順慶からめ取て手がらよせよ、いや宏や〳〵おりや祖父樣をえゞる事ゝいや宏やゝいのふ、召捕ずゞ親子の縁を切ふか、夫でもいやじや、いやじや〳〵と政千代が辨へなけねど遺よゝ、血筋をかゞふ具實具身、さしも我强き順慶も、英氣くじけてがゝと折、刀引拔其儘よ腹よぐつと突立れゞ、祖父樣がいた〳〵じやとわつと泣子をかき抱、欠寄操八重梅も俱よ左右よすがり付、淺間敷の身の果やとすが

り歎けば順慶も、目をゑばたゝき聲曇らせ、今迄我强ふ意地を張、弓矢の義理も祖父でない、此順慶を政千代が、かばうてくれた一言が百千萬の雷かゴリヤ。此胸ゑ答へたいやいと、始て折る發起心、聲も涙の八重梅が、夫程辨へ有事なら斯成行ぬ其先ゑ、おせ改めてい下されぬ燒のしきゝす夜の鶴有と有ゆる生類迄、恩愛ゑらぬ者いない、弓矢の意地ゑ聳鼻親子別れて敵と成、武士ゑい何が成事ぞと、顔見合して母娘、歎けば俱ゑ政千代も、足摺ゑたる有樣を見るゑたまらず一同ゑわつと斗ゑ聲立て、歎く涙い名ゑしおふ堀江の淵ゑ波立て岸ゑ寄來ることくゝ、成政重て、ヤア〳〵勝五郎、飛龍丸手ゑ入ば、亡三平が盜賊の惡名まぬがれ、出立の時至れり、汝い是かゝ聚樂の御所へ馳參り、此太刀を差上直樣ゑ、敵討の願ひを達し、首尾ゑふ仇を討負せ其名を四海ゑかゞやかせよ、〳〵、有難し忝し、今てそ花咲うどんげの時待得たる此身の會稽、仰ゑ任せ某い是かゝ都ゑ立越ん、

一時おくれば一時不孝、心急げば早お暇おさらば、さらばと飯沼に飛がごとくよかけり行、跡よ操に心付、懐剣取手を成政押留、血筋の縁を斷切て我子を跡目の願ひならんか、成政が家國に高臺院のは布施物と、懐剣もぎ取り腹よぐつと突立れば、何故と驚く人々、順慶かんじてさこそ有ん、成政が家國に一旦滅亡よ及びしを政所の吹擧を以て肥後一國の大主と成、其恩義有御方、献上の黒百合方は遁世有たる事、本意よ有ぬ切腹ならん、ホ、天晴の明察、其場よ於て死べき命、けふ迄事を延せしに、は太刀の行備詮義の爲、事落着の其上に、今こそ報ふ所領の恩義、ホ、佐々の家名も筒井の氏も、武門の義理よ報ずる命、サ、義心に同じ未來の友、仇も情もとけ合て、聟殿舅殿ムムヘヘこあら面白の冥途の首途と笑ふも、泣も因縁の、佐々の黒百合筒井の闘、順慶町の來歴を末世よ傳へ「とゞめける

六冊目

大坂出てから早玉造り笠を買ふら深江が名所、諷ふ聲さへ、ばんなりと、名代の菅の深江笠、着連て急ぐ伊勢参り、邊も繁き松原ゝ奈良街道と賑ゝしき野分ゝ誘ふ風ならで、宙を飛くる蜘介駕籠、またけじや合点か合点じや、エイサツサ扨も重ひ、旦那じやと道端ゝ籠駕下し、同サア〳〵松原で下す約束モウ松原でござりますと、息もすた〳〵駕籠のたれ、明れゞ立出る佐藤剛介、三平を討て立退ん、舍定めず月代も延て小すごき頬がまへ、相棒ゝ小腰をかゞめ、同きはめ極ゝ玉造から八百、外ゝ深江で中食代と、酒肴の代取かへて置とおつゝやつた故、貳百四十拂ふて置ました、お次手ゝ酒手も少々、〳〵お願ひ申ます、〳〵悉算用致しくれたい物なれ共、路用を遣ひ切して持合さぬ、歸りゝ算用してやらふといふゝぎよつとし顔打あがめ、同アコリヤ初手から此積りで、食代も酒代もおいらゝ拂ゝしたのじやな、ネア相棒よとひやうもおいけつの穴の太いやつも有物じやないかい、ネア、おいらがそん

なゆすり喰ふ物かい、算用せよやたゝめ〳〵、ヲ、合点と両方から、胸ぐら取をゐせ笑ひ、首筋摑んでほい〳〵 投出、喰ふてもひるまぬ我むさや、又取付を面倒あと、大だらひらぼと拔放せば、わつとへたばる両人を只一討と振上る、刀の下よ手を上て何ぞお助け〳〵と、泣詫るこそいぢらしき、そんなら算用ハ歸りだぞよ、イヤモウお歸りハ愚、譬ば算用がない迚、ヲ、そふゑや、ハイ〳〵 命よハかへられませぬ、よいな、ゑたばたぬかさばぶち捨んと思ふたよ、命冥加なうづ出めらと、刀を鞘よ納た顔、夢見た心地両人ハ駕籠かき上ていつさんよ命から〳〵 逃て行、跡見送りて打笑ひ、ヲ、ヲ、よいべらぼうも有物じや、コリヤナイ爰よ金ハ有ハやい、三平を討て立のく砌、氏政方借用した百両、あそこ爰で女郎を買て、モウ跡よ廿両斗、大分心便なくなつた時よ夕べ新町で買たやつハ、よく勤るやつで今朝迄一睡も寐なんだ故寐むたく成た、どこぞ此邊りで一寐入やらかしたいものだが、イヤ究

竟お此木蔭一いびきやつてくれふと世を雲水の敵持野でも山でも行付次第かしこをさして行過る。爰よ哀をとゞめしゝ、飯沼三平重治よ契りかゝせし津の國のお勝ゝ一夜伏見ゟ夫の敵剛介を、尋やつるゝ旅はゝきうさと、つらさよ身よ積る癪を押へて立留り、思へゞ思ひ廻す程ほんよはかないわしが身の上太功樣のゝ旗元、飯沼三平樣といふ、景圖正數よい殿ゝよ、お情受た冥加おさ女よ生れた身の過報と、悦んだかひもなふ一度かゝしたお枕が色となつた非業のゝ最期、殺した奴ゝ其晩よ私を口說た侍め名も所も去らね共、よくさの余り一刀、ふのれ敵を討ふぞと、跡を慕ふて出たけれど其夜も出合ず夫からよ、方々と尋れど、廻り逢ぬ口惜しさ、つもり積た此積で若や命を取れたら冥途よゞざる三平樣よわしや何と云譯せう、夫が悲しい〳〵と、八目なけれゞ取乱し、わつと斗よ轉び伏、心ぞ思ひやられたり、うら紫の所縁とゝ、去らねど縁が

導で、いきせき來かゝる筆介が、見れば女の歎く躰、心得ずと立留り、女、往還ゑ取乱し歎く躰旅の者と相見へるが、どふした譯何故歎くと、尋られ、お勝いはつと心付涙留て起直り、是いてハ親切ゑよふお尋下さります、私い奈良へ參る者、道から積が差込ませて、あんまりの心苦しさ、夫で泣かゝハイ、薬の用意でも有か、ヤア夫も貯おりましたれども、呑切して、最早ないか、ハイ、ハヱ不便な事だ、幸是ゑ黒丸子が有是を呑〳〵と、忠義の者い情迄、厚き恵ゑ手を出し、エ、お有難ふゞざりますと、戴く中ゑ行過るを、何思ひけん後から切込力を透さぬ奴、何の苦もなくぶち落し、首筋持てぐつと引すへ、心得ぬ女め往還ゑ取乱し癪ゑ腦とヤ故、薬をくれて罷通れば、殺んとする横道者、正敷うぬい退はぎだな、ヤ左樣な者でいゞざりませぬ、私い夫の敵討、其おたしなみを例見てお頼ヤ一通お聞なされて、下さりませと云ゑ其儘突放し、面体とつくと打詠、いか樣そふいへば僞り共

見へない、頼といふの助太刀か、ハイ仰推量の通、夫を人手ゑ殺されて、口惜さゑ敵討ゑの出ましたれ共、何を云ても女業、武家ゑ育たぬ悲しさ、太刀打迚も云らぬ上、癪ゑ腦て便ない、此身不便と思召、助太刀をして給へれと頼む身方も頼まるゝ身ゑ望有筆介の、何と答へもなかりけり、お勝の猶も摺寄て、敵の名の云らざれ共、私が夫の太功の、ハイヤ待た、めつたゑ其名を明すまい女業ゑ及ばぬ大望、承知してくれたい物なれ共、此義の承引出來ないと、いふ子細の、おらも敵討だのやい、佐藤何某と云者ゑ、重恩有主人を討れ、無念の余り若旦那ゑ力を添、俱ゑ敵を尋る身の上、女でなくの道連ゑ成共、致くれたい物成共、何を云ても任せない、心がせけば女中繰有の重て逢ふ、さらば、と斗もぎとふゑ同じ敵を尋る共、顔の互ゑ云らぬ同士殘多くも行過る、跡ゑお勝の頼切暫し涙ゑくれぬたる、始終後ゑ立聞剛介云づ〳〵傍へ立寄て、助太刀が望みならば此鼻が仕てゆ

らふかと、云ふ驚き起直り、顔つく〳〵と打詠、こあたいどうやら、ヂ、相恰
ゝかゝれ共、三平樣を殺した侍こあたゝ逢ふと色々ゝ、かん難をつくし
たゝいのふ、ヂ、おれもわれゝ逢たふて、大ていさがした事かいやい、コリヤ三
平さへ手を切たら、我心ゝ隨ふやくそく、ぶち殺したら言分ゝ有まい、サア
抱れて寐い、抱れて寐いとゝ穢らゝしい、夫の敵と操のお勝、眞向目當の
恨の刀、拵元ゝつかと、ヤ、〻、出かす〳〵、そふぬかゝや返り討なぶり殺し
だ、觀念せよと、ひらりと拔て打込を、かよゝきお勝が上段下段、命限り、根
限り火花をちらして打合しが何かゝ持て叶ふべき、たゝみかけたる太
刀風ゝ、お勝ゝかつぱと轉び伏、折から向ふゝ人の影、なむ三寶と手早く
も頬かぶりする間もなく、欠くる筆助すれ違ふ、かた先摑んで引戻し、見
合す顔ゝ、筆介かゝ、剛介めよい所で逢たよな、わるい所で逢たなと、
逃行剛介引戻し、爭ひいどむ筆介が、あぢらを一當たぢ〳〵たぢろ

く中よ雲霞霧間を追行筆助が、思ひすべつたりお勝が死がい、こなたへお前へ、見合す顔へ盡せぬ奇縁、由縁へ、後よ〻ゑられたり、爰も名高き闇の峠よゑげる樹木の蔭、仕似世も古き澁紙よ法を導く執行者の鉦幽よもあれ哀り、あへやかしてよ砂煙りけたてゝ欠來る剛助が、跡ふり返りとつくと見て一息ほつとつぎわへず、ヤレ〳〵女めよ思へず出合何の苦もなく返り討、心地よいどふぶくらへ、かけつてうせた筆助め、どふやらこふやらかけ拔たが、ぜひ此道へうせるへ治定、どふぞやり過したいものじやがと、見廻すてなたよ鉦はる坊主、夫と見るよ立寄て、無二無三よはぎかゝれば是へと驚く横頬、ひつゑやり、笠も撞木も引たくれば、きもをつぶして其儘よ一もくさんよ逃て行く跡よ手早くけさ衣、笠引かゞき擲き鉦、ちやんと見まゞふすがたとへ、白砂ふみ立欠來る筆助、慌よ此道へうせたへ治定、但へ先へかけ拔たか、譬何國へ逃る共追付いで置べ

きかと、尋る人の有ど共、さらず其場を行過る、跡打見やり、ハテ、雲を霞み
はしるい〳〵、コリヤイ爰ぢやいやいハテよいべらぼうも有ものだ、ドリヤそろ〳〵
と出かけよ、と衣かなぐり笠ぬぎ捨、はかりすましてゆう〳〵と道引違
へ出て行、こなたよ忍ぶ道心者、木蔭をそつと立出て、ヒヤ扨も〳〵とひや
うもないやつも有物じや、併何も角も置ていんだい、ガまだしも何かい
此擲き鉦、コレ取れたら翌日から口も叮きやまよやならぬ、ヤレ〳〵ひやいか
事、ヤレ〳〵あぶかい事と、落たる品々一々よ拾ひ集めて見付る財布、ヤア〳〵金
じや、ホイ、跡をも見ずして「たちかゑる

七冊目

かへろうと鹿い鳴共かへりこぬ。其筆介が古郷の、妻のお弓のすぎいへ
い南圓堂よ出し茶店、内い氣儘なばゝおくず恩愛さらず世のぎりも、さ
らがよはぢぬたくらもの、ぼうき持手もせか〳〵と師走生れと見へよ

けり、折から來る虚無僧の形もうさんお尺八を、聞かおくまいつかふと、ようそやかましい吹ぐらし通らぢやれ〳〵と、いふ内を覗いてはいる虚無僧を、夫と見るか、ヤイ〳〵、通れといふいいけといふ事じやいやい、イヤ通りても苦しうおい乳母久しいなと天蓋を取退る顔見て恟り、ヤアお前い和子の剛介樣、久しぶりでまめな顔、マア仰山な男ようなちやつた事いい、そちもけんごで重疊〳〵、そして見るや薄い形、コリヤこなたぢくじつて、ごきの實が上つたのじやの、イヤ何もぢくじりいせぬ、意恨有て飯沼三平と云ふ者、ぶち放し、暫らく身を隱さん爲、是迄尋ね參つたいやい、ふゝ、貯でもでざんすかへ、イヤ其貯い伏見を立退砌、北條氏政か借川したれど、爰かしてよ遣ひへらし、殘金廿兩、昨日まで所持致したれど、くらがり峠で落して去まつた、エヽ、なんの事ぢや、そんなら成ませぬ、いやでござる、尤こなたを育た乳母じやけれど、給銀貰ふた替りようや乳が呑して有、コリヤ五

歩〳〵の出入といふ物、此いふ時節よ、宛もない人誰かくもふて置物ぞいのふと、塵灰付ず主従の、よしみも去らぬ人非人、ぶち捨んとゝ思ひしが、思案仕かへて詞を和らげ、成程其方が申所、尤な樣よも有がコリヤ、此剛介宛が有ぞよかくもふ事ならず、鎌倉まで參る路用の金子、十両取かへくれなゞコリヤ、千両で戻す、又廿両借なゞ二千両、百増倍で返濟するがさゝどふだ〳〵、こいつゝどふやら面白そふな相談、そしてアノ鎌倉へいかゝやつたらどふして金が自由よ成ます、サ其義ゝ、其方も知る通り某が實父北條氏貞、松永よくみし没落の砌家來佐藤剛左衞門、某をつれ立退我子とし其後眞柴家よ有付伯父甥のよしみ有、鎌倉へ參れゞ何事も心の儘、だ、成程其譯ゝわしも承知じや、其詞よ違ひなけよや、どふなとして借て上るがコレ、百増倍ゝ違ひゝせんかへ、何の其位の目くさり金契約違てたまる物かうまい〳〵、時よ此比ゝ慰の拍子ゝわるし、どふして拵へ

た物で有ふ、ヨシ〳〵、此間から元手よせうと思ふて娘めを妾よやる相談いつそあれなと急よ埒明ふ、扨其時で落した金も惜い物、どふぞ吟味の仕様が有そふあ物、コレなんぞ目印いあいかいなア、氏政ゟ借用の金成い、三ッ鱗の極印、夫もよし〳〵、何ぞや有ふが今日中よ、廿両い拵へて上る、コレ二千両ぞやが合点かへ、くどい〳〵、ホヽ、アレわしと云た事が念入て云かられた、年が寄とくどふなる、ヲヽ、是い云たり百増倍よ乗がきてまだ間事を忘れていた、今云云やつた飯沼と云所よ、筆介といふ奴い、ござんせんかへ、ムウワリヤ又夫をどふして知つてをる、ヲヽ、知ておらいでいなア、其筆介いあれが娘の聟ぞやいあ、アヽスリヤ此家よいゐられんいい、アヽコレ〳〵大事ない〳〵、筆介い五年此かた内よ居ぬ、氣遣ひないいな、又アノ一間よ飯沼の後室病ほうけてゐるのを聟めが預けて逝だけれど、こいつも金聾よ成てゐれバヤモ何聞しても大事あい、併モヤ娘が戻る時分ぞやどこぞへ隠し

て置たいア、よい事が有ぞ〳〵、こちでするぼんいつでもアノ下家、疊も敷て横手の敷へ拔る穴も拵へて有マア〳〵お出と夕日影疊の下へ移り行、何しても、身過よ仇い嵐吹秋の、夕ぐれとつかいと茶店仕廻ふて戻りくる、娘のお弓孫が顔、夫と見るなばしおくま、ヲヽ、娘戻ヱやつたか、けふい日和もよし、店もずつゑり取たで有、アイ大分賑やかよでざんした、そふで有〳〵、そふして筆めい寐おつたかい、ドレ〳〵取てやらふかと、常よかいつた深切い一物有ふと見て取て、イエ〳〵此子い夕べろくよ寐なんださかい、直よ納戸で寐さしまず、コリヤ〳〵娘、咄しが有ぞよ、アイ〳〵直よくるいいなと、納戸の内へ入跡へ、表へよつこり太郎松の嗅、おくま様内よか、こなたが頼まゑやつた妾の口道心者の敎清殿が、俄よ金持よ成て、爰の娘よ大執心、だんなか來て相談さんせんか、ヤ夫い耳寄ちつとこつちも金がせく、道心者でも何でも搆い如、ドレ〳〵直よいて相談せふかい、イエ〳〵嗅様、其相談いいやじやぞへ、

と、立出る娘をよらみ付、何じや妾よ成のいやじや、イヤ此間からそふ言んすけれど、わしよい筆助殿といふ男がござんすいな、生の方から惚ひがこひでも、私がお前を嫌へばよい云やあいかいなア、またそんなたいけつくすいい〳〵、儕が撞木町よ勤しておつた時、引かけてうせた聟めろくな奴でも有事かやつこらさの果、わんなやつ當よしてたまる物かいやい、五年此かた内よおかぬこそ幸ぢや、まだ汐氣の有われ、妾なとさして慰の元手拵へよやならぬいやい〳〵、イヤこんな事言ていたいい果ぬ、何でも金が急よ入いいのサア〳〵太郎松の嘆行まえよ、と一人いらくら熊手ぱく、百增倍の種よ成小判の耳より云てこいと、爪とぎ立て行跡よ、お弓ハ入や入相の、鐘かう〳〵と響きける、何れの里も、夕闇な、照すあんどの火かげも細き一間の咳の聲、お弓ハ聞かは是ハ云たり、又ハ病人が悪ひそふな、ドレやふたいをと立寄て、明る障子の、打伏て、床よつかるゝ病人ハ飯

沼三平が母寄浪、お弓と見る方起直り、チ、お弓女郎戻らぬやつたか、ハイ只今といふた迚、聞へぬ病人指先でお咳を聞てあんじまする、又お悪ふござりますすかへと、書て見せるを讀下し、イヤ〳〵氣色ハ大分よいけれど、此咳ハ弟の勝五郎、兄三平が敵、佐藤剛介を打ゑ出たハ此春、モウ百日の餘ゑも成けれど、本意をとげた便もせず一躰かよハい生れ付、若や病ハおこらぬかと案じ出すと此咳、長い月日ゑ耳ハ聞へず、ア、待どふしい事でハ有ぞ、ア、お道理でござります、モ私が思ひも同じ事、敵を尋ゑ行迚も、どふしてゐるとついちよつと便した迚ハ主人が、よもや呵ハなさるまい、明くれ内ゑ女房子が、案じているとハ思ハずか、聞へぬハいなと斗ゑてかこちくどけば、アコレ〳〵何で泣ぬやる、そなたハ癪でもおこつたかと、問れてハツト涙を隱し、イヱ〳〵どつこも悪ふハござりませぬ、ホ、、、つい涙のお相伴して退た程ゑの、こんな事思ふてゐてハ一日も暮されぬ、山へいけ〳〵、ホ、ほんゑ

あんな嘘樣の事なら、私が留主の内へお藥もろくゝ上ずゝやわろ、トレせんじて來て上ませう、お風召なと病人ゝ、蒲團打きせ其儘ゝ障子、ぴつゝやりさす足元、何やら光ると手ゝ取上、サ、コリヤ出乃ゝや、ゝ、爰ゝ有ふ筈がゐい、猫でもくゝへてきたそふな、テモマあぶない事と、片寄て、藥せんじゝ入ゝけり、折からいきせき、ばゝおくま、敎清引連門口迄立戻つて振歸り、敎清樣俄ゝお前へ金持ゝ成て、おれが娘のお弓めを妾ゝゝたいと云望、モてつちへ急ゝ金へいる、幸の此相談譬あれへどふ云と、親のかふけでやり付て見せるが、ヤ手を打だんゝ成て、今のへ間違やせんかへ、今のとへゝ、うとい人じや、れそゝやへいの、イヤ夫へ氣遣ひゝ給ふゐ、此間迄鉦擂たかんかん坊の此敎清ふくつんゝ成た本尊、さらば開帳いたそふかと、首ゝかけたる金財布、見るゞおくまが眼を光らし、マア夫を、イヤ夫からはろうじ、本望さへとげたらいつ何時でも渡す金、ずんと有ます、ヤよつく鳴ます、

ま、ハ、わ丈や夫見たので痞がおりた、そんなら是から内へは入て娘めゑ得心さす間ちつとの間爰ゑ合点ゑや〳〵、アハ、コレは様おまや生れ付て近がつへゑやぞや、サア よいいのと内へ入かわなり聲、娘〳〵 お弓よ〳〵と呼聲ゑ、お弓ハ納戸立出て、ヲ、嗅様戻らゑやんしたか、ヲ、我内ゑや物戻らひでいやい、ヲ、モ、そないゑ云ゑやならんかいな、云たら何ゑや、おれが腹からおれがうんだわれ、袤て喰ふと燒て喰ふとおれが儘じや、夫ハゑれた事、サア そんあら最前いふた世話やきの事、幸よいせハ人が有て相談して連て戻つた、今爰へ呼込程ゑ、是から大事ゑかけおれ、ア、嗅様めつそふな、ソリヤいや ゑやぞへ、最前も云通り、わしゑハ筆介様といふ男がござんす、何じや、筆介ゑや、コリヤ ヤイ五年跡から身上拵ゑうせて戻らぬ上、がりま迄殘して置て粒三文おてさぬどふならず、聞てゐてハ口がひやがるハいやい、我ハ世話やきがいやじや有ふが、おまや又鐚めがいやで〳〵 いやでならんぞよ、

と、親子せちがふ表ばば樣〳〵と表へ出、敎清樣なんじや、ャ何じや所か内で、いやじや〳〵云のを聞ておるやモウ氣が氣じやない、脉体いどふじやの、サアよいいの今せりふの最中じやマア待ゑやれと内へ入、サア四の五いない、智めを思ひ切て妾よ成おれ、いやじやいいあ、まだ親よ口答、いやでもおふでも親のかうけじや、おれが儘よせよや成ぬさすまいといふて見い、ば樣〳〵、エ、マせいしない又呼いいのやかましいなんじやぞいの、サさすまいといどふじやの、エ、何を聞はつゝて、こおたよよい事をさすいいの、さすか、チ、さす〳〵、ヤコレ又うろ〳〵さすのじやないかや、エ、モわしをきよろ〳〵さすいいの、チ、そんならよいかの、サ今よふ成所じやと裾引まくつて走り入、サア娘いやといや喰口のへる樣よ奥の病人も孫の筆松も、ほり出すぞよ、アめつそふなあなたをそでよしてい夫へどふもイヤどふもてふもゝいる物かと、欠入母を引留る、外よい敎清坊主首、長ふ短ふ待

兼て、ば樣〳〵、又かいのさらぬいの、娘放しおれやい放さぬか、放さゝや斯ぢやとゝゆろぼうき、もへる血氣ゝ待かねて、顏なとゝ欠入敎清、どさ紛れゝ間違でめつたやたらゝ打据られ〳〵と、うめくゝ恂り、おいてふためき引起し、敎清樣かいのこらへ性のない、いつの間ゝは入たぞいの、どこもいたみいしませぬかや、少々いどやされても腰の骨い此通り粟のおこしじやないが岩じや〳〵、此方ゝ搆いすと、其方を、埒明さしやれ、合点ぢや〳〵、病人めを引ずり出そふか、夫い、孫めをぼいまくらふか、夫い、〳〵、とせり込せつぱ、拔さしならねば是非なくも、人見に供と胸をすへ、そんなら、〳〵とふぢや、ぢやいあ、夫を何とこぼへる事が有、ば樣〳〵とふじやのふ、とふい、ぢやいな、〳〵嬉しや〳〵、先埒が明た、すぐゝ引導渡そふかい、せかぢやるも尤じやが、こつちも金がせく、金せふかい、〳〵肝心肝文の所をつらぬかね

ば、から頼母子掛る樣な物で出しよくいせめて帶なと解た上、エヽ、ほんゑうぎたゐい人ゑや、そんなら帶ゑやぞや、承知〳〵、ソレお弓きり〳〵と寐所を敷やい、ホヽヽ、そんなら敎清樣帶ゑやぞへ、承知致した、エヽ、きり〳〵ゑをらぬかいやい、ホヽヽ、そんなら敎樣帶じやぞへ、エヽ、まだかいやい、ヲモ埒の明ぬと押入ぐいらり、ふとんばた〳〵木枕ゐ並べてゑやんと目くばせし、邪見者でも氣を聞しはづすい神國白紙の障子引立入ゐけり、跡ゐい恐悅敎清い、早漕付た弘誓の船、サア〳〵寐よふとお弓が手無理ゐ引ぱる蒲團の上、外の人ゐい並べじと、夫ゐ誓ふ木枕も今い阿責の火の車、氷の地獄八寒の、涙の氷柱もこゐたい夢中、そゞろ浮立武者ぶるひ、マア〳〵ちよつと手附ゐと引寄抱付いやらしさ、お弓いはつと消たき心地、突放さんと思ふ氣を ゑつと納てせいしない、マア置ゑやんせと押退れば、ナヽコレせいしないといとふゑや、夫じやゐよつて初手から、おりや近がつゑじやと斷つ

て置たのじや、夫ハそふなれど、私ハ又余りさつきやうなと情が移らぬ、ヤア咄あとさしやんせと一寸遁れよ天窓をかき、夫じやといふてイヤ了敎清樣へ、ヤア〳〵お前ハヤア私が樣あふつゝかあ者、とふしてヤア此樣よ思ふて下さんすへ、ふつゝかなとハ曲がない、云ハ甚くだあれど、茶店手鞠や揚弓やとうぜん屋、皆〳〵うつくの噂娘、ぎんじ立て出る中よ貴邊の樣なあて首が久しい物じやが唐よも有か、あれハ執行よ歩き〳〵、玉子の樣な其顏を見る度〳〵よむつく〳〵、鎌でちやきる樣よ立のびて、抱て寐たらヤアよかろ、ヤア、ゑゝ噂じやと人ゑらず、白い涙のこぼれ初、かん〳〵ぼうの敎清が大まいなおひんよ、有付た仕合せの直るハ、一時有がたや、爰の婆樣が貴樣を妾奉公よやりたいといふて居る噂ハ合たり叶ふ戀、コレ朝晩よ願ひ込だ、此珠數ゑやないがつながる緣ハ是非がない、往生さしてと又べつたり、猿が竹の子抱へしごとくさんばい仕兼て、見へよけ

り、お弓い猶も押退て、ア、もやつぱりせいしあい、そしてまあ衣も脱ずよ勿躰ない罰が當ろぞへ、ほんよなあ、、、ついせぎりが來て忘れて退たと手早よ衣取てほり、帶解かゝるを伺ふお熊、どつこい待たり帶じやア、せいしない今が成佛得脱じや、約束なれどア跡で、イヤ〳〵爰がこつちの性根じや成佛の枕金、おくれりや直よ荷持連お前のお影で、伊勢參宮宿屋でごろみや搆いす百と二百のけころ打、チエイ〳〵〳〵、金受取よやならぬぞ〳〵〳〵、そんなら云よ事がおい、それ渡したと敎清がさも惜そふよ出す金を、見るゆ早く引たくりお熊い勝手へ走行、跡よ敎清氣い上づり、お弓が帶よ手をかくれば、何と遁んどふいをとうろ付中へかけ出る筆柾、嗔乳呑ふとかき付幸、よふおじやつた〳〵〳〵と抱取嬉しさてなたいやくたい、ホイ又あやかしが付た、ソレ、ちやつとどやし付て寐さして下され、ヲイあいとういへど寐さゝぬ氣、うるさい傍をよい退汐、ヱヽ、此子いとつとも

ふ悪いくせで下よ居るとねつから寐ぬ、とかい立裾よまとひ付、こ〳〵どこへいかゑやる、此子を寐さすのじやいい、寐さす間ならせふ事いないけれど、おりやもふどつと傍よ居ぬと心便がない、早ふ〳〵こせつく程、何がな延す子守歌、ねん〳〵寐起よも待ど男の便なく、沖の帆影や夕日影、ゑん氣な暮の鐘、逢たい事よ、どふじやもふ寐たかの、まだじやと寐ぬ樣よゆぶれど因果と寐かゝる子、コレ寐るのかいのふ目を覺ゑやいのふ〳〵、コレ〳〵目を覺せといどふじやいの、目をふさぎやといふ事じやいいな、里の土産よ何貰た、でん〳〵太鼓よふり鼓、振廻されて筆松い、ねつと斗よ泣出せば、こなたいきいやり、ゑもた、こんな又因果な事が有物かい、情ない〳〵と天窓をぐいし〳〵腰ふよや〳〵、元氣はつたる坊主首ぐよやりと、なやす斗なり、戀無常いづれはかなき韮の露、塑い置共亡人い返らぬふ勝を葬て、古郷へ急ぐ筆助い斯共しらず表へ、

嘆、戻つたと門の戸ぐはらり、お弓ゝ見るか、こちの人筆助殿とかけ寄んとして跡見れば、敎清が帶解ひろげ、はつと抱子よ顏差付、なつかしい共得云もぬ心そ思ひやるせなき、女房の風情此場の躰、合点行ずと打通り、お弓枕おらべた寐所よ取乱した此御出家、どふやらおかしいわろじやなおかしわろじや有い譯、此親がいふてかそふと、お熊ゝずつと納戸を出、筆助此人ゝおれが相對得心で、お弓を妻よさすのじやが云分が有かお弓ゝおれが女房、てな樣の儘よゝ成さすまい、太い事ぬかすな、儕りや、元奴こらさのえくじ者、娘とどれ合て連立てうせたを、内へ入ててましたゝおれを養ゝそふ爲じやぞよ、夫よ儕ゝ古主へ歸參する。といふて、五年前よ内を出て粒三文貢もおこさず、がりま迄置た上、お主でひのと、どこの牛の骨やら知ぬ聾のどう婆め迄、役害よさしあがつて其大な頬ゝ何じや、われが樣なかいえよなし、當よしたら親子者がら、

骨箱擲き上よやならぬよよつて、娘を妾よ賣のじや、ぐつとでもいふて見い、そゝやてお樣が無理じや〳〵、無理といとふして、其爲よ後室を預けた時金子廿兩渡したじやでんせんか、ホ、こゝやおかしいわい、廿兩の金で一生喰る物じやと思ふて居るかあんだらくさい、一年滿中世帶の物入、米やら薪やら味噌やら鹽やらい云いでも知た事、正月よい祝ひ一式盃よい尊聖の餝り物、彼岸の茶の子年忌の雜用、臨時よ發るい付届懇中よ參宮すゝや、賤別をするのが王法でんぶの一ッもやらねゞならず、おそこの婚禮爰の法事ソリヤ產だいソリヤ死だい、何ぞれかぞれ入上よ親子が身の廻り足袋ゆもじ、ちよつこと孫めが褌かくか、娘めが紅粉白粉、まだ其上よアばゝの藥代やら物好、此中で羊羹のイヤ細螺がよいの寒晒の團子よせいと、榮耀の八百つゝき聾の病人迄扱ふが、なまやさしい廿兩で足物か、イヤ夫もむりじやない、九五年が其間粒三文おこさ

いでも、喰るると思ふてゐるたゝけ者、おこがましう歸參〳〵と逝だ所が一合半、物相飯喰花聟殿、此方よ入用よない、足元の赤い内聾のどう婆引提て、どつぢ〳〵逝で貰ゝふと慈悲も情も白髪の婆、よらむ眼玉ゝ鬼瓦朝日よ光るごとくに、教清ゝ胸撫おろし、ア、嬉しや折角盤梅よふ漕付た所へあやかしが入て、ぼうちやくして居るたゞ中、男じやといふて戻つた故、釣上つた陰曇が渡した金、おむ三やり事よかゝつたと思ふたが、聟殿の來歴委しう聞て落付た、ヤコレ婆様そんなら娘ゝいよ〳〵おれが妾じやぞや、ハテそふはちやいな是からお前ゝこちの嬶じや、精出して仕送つて貰ふた上博奕の元手も貰よやならぬ、コレ娘、寢て居るがき片付て、智めもどう聾めも追出し、おうへも掃て盤水でも打て、寢所も敷直して、早ふ旦那様の御機嫌取おれやい、こゝ、ゑんどゑやべるのも大躰じやないとけんよよない顔余りど、お弓ゝ我子傍よ置、悔げよ母親の顔打詠め、コレ嚊様、エヽ

お前ンなア、今も聞てゐれバ五法といふ事云ゑやんすが、親子の恩愛、夫婦の義理といふ事並へンおいかいなア、たとへ主が奴でも緣有バこそ親ゑ成、女房ゑ成からン誠を盡すが人の道、筆助殿の御主人ン、人手ゑかしりあへないに最期、夫故ゑお家ン沒落、主の身ン弟に樣のお供して俱ゑ敵を尋る身、力ゑこそンならず共せめて預る後室樣、大事ゑかけよとン思ンすゑ追出さふとの無得心、夫が悲しい斗ゑ夫ゑ對し言譯の、ならぬゑたらゑ成たのも、皆お前の胴欲故、廿兩の其金もに介抱ゑする事か、われぬ博奕ゑ打果しまだ其上ゑ家内の者養ふても置樣ゑわつは、さつはといはんすが、五年以來私が手一ツ、夫ン歸參叶へ共御扶持ン知た不自由な身内ン私が賄へン不自由ンせぬと貢をバ、留てやつた其かはり、松の位で全盛ゑた昔しを捨てゝ出す茶店、寄りくる人ゑおぶられて笑ふて居れと心ゑン、泣て汲出す端香ゑ涙の、雨のたへ間なき、其世渡りも油

斷せず、遽間が有ゞ引糸のゆゑん求めて墨磨き足袋の賃縫絞さし、内へ戻れゞ夜なべよゝ人の髪迄結覺へ心一ぱい拵でも繁花あらねゞはか行ず、叶ゝぬ時ゝ城下本町、筆松を脊よ負線香〳〵、薄唐松花紅葉、お子達のお慰花火せんから花車、どふぞ買て下さんせと突付廻り賣歩く娘不便と思ゝずかお前ゝ鬼か蛇身かと恨の涙一時よ夕立そゝぐ涙雨、眞實見へていぢらしき、筆助ゝ女房引退たゝけめ、傍邊よ聞くも有ゝい親ゝ子の爲よ隱し、子ゝ親の爲よ隱すが道ずゞ〳〵と發才でゝ有ゝい、殊よ此筆助ゝ大望を拘へた身、譬ば主人でも足手まとひゝ連られぬ、じやよつて、譬母者人があまよ逆樣な事いゝ去やらう共幾重よもば詫ずさよやならぬ、女房を呵りてかして此親よ飴ねふらせ、どう聾めを置て逝ふとゝこゝやの〳〵、そこをお詫ずゝ爰よ路用が廿兩、太切ない金あれ共脊中よ腹ゝかへられぬ、お弓が身の代、後室樣のば介抱去ろと思ふ

て不肖ながら是取て下さりませと、授出す金を見るかよつこり、何じや、此金で不肖せい、イヤこりや不肖せよやなろまいい、筆助イヤ聟殿、此金を取からアア有内ハ中よしじや、最前もいふ通り一生ハないぞや、へるぞや、イヤこりや云いでも知た事、アアのゝ樣のわらじコレ納めまゝよ〳〵と矢かも早ふ色〻よかハる此場ハからくり的、高入道がよよつこりと、コレ婆樣、其金取ておれが方ハ、とふ付る、イヤこなたの方ハ斯付ると、手を引立て無理無躰、表へ突出ゐ戸をぴつゝやり、敎清ハ拍喧た心地、コレ〳〵こりやどふするのじや〳〵、ハテ知た事、聟が戻つたよよつてこゝたハ變改じやハいのふ、ハテこいつハゑいわい、ゑかしよふ思へば元〳〵の出入、緣のないのハゝよ事がゝい、時よ何やら忘れた樣な、チ、そふじや、コレ金ハ〳〵、太い事ぬかす、アノ金戻してたまる物かいやい、ソリヤ又とふして、どふしてとハ盗人め、わゝやきのふ啼でおれが落した金じや、どつこい〳〵證據が有かま、

一両〳〵三ッ鱗の極印が有、但あらがふなら代官所へ届けふか、サア夫れ、サア〳〵どふじや、ヤイ南無三もくが破て來た、コリヤたまらぬと敎清れ、元のもく阿彌かん〳〵坊雲を、霞よ逃かへる、斯る折から下家ん、筆助目がけ突出す白刃、ひらと飛退これ怪し、と窺ふ目先へ又ひらと胸よきつくり上かける、疊をさゝゆる婆お熊、投ても退ても我武者もの、むゑやぶり付ば面倒なと、脾腹を一當見向もせず、蹴上る疊の下簀の子、見れば かしこへ拔る穴、エ、早逃失しと齒切を嚙、こあたの藪垣押分てくゞり出たる剛助が、手裏劍ぱつゑり逃行を、やらじと續いてかけ出すを、ヤレ待筆助、剛助が落行先れ相州鎌倉とつくりと聞取たれば追よれ及ばぬ〳〵サア待ちやいのと聲爽よ押開く、一間よ立たる後室寄浪ぱつと斗りよ筆助れ敬ひ、平伏なしよけり、後室重て我其方が斗らひよて耳ゑいたる病人と僞り、事の樣子を窺ひ見れば、薦僧よ姿を變じ最前來たる佐藤剛助、疊の下へ

かくまふも忠義よあらぬお熊が欲心どふして又かゝ樣が、其剛助を此下家よ、コレ其子細ハ筆助が云聞さんには主人三平重治公伏見よりいて横死の跡、飛龍丸の太刀紛失、三平公よ疑ひかゝれハ舍弟勝五郎樣姿を略し木造りと成、筒井順慶が屋敷へ入込、飛龍丸のは太刀は詮義有し故、敵討は免有共、行衛知ざる敵剛助、草を分つて詮義すれば、彼よ乳房を與へし乳母、此奈良よ住所する由、姑お熊が身の上よ大概似寄詮義の綱、實否を探らん其爲よ後室よ予舍め、此家よ留置は難、又此筆助ハ奈良街道を徘徊して、敵よ心を寄る內、昨日ふと松原よて駕の者が噂の侍、扨ハ敵剛助と取てかへして出合松原、口惜くもやみ〳〵と逃せし跡よ躓く死骸、呼生て樣子を聞ば、は主人三平公よ契りを込たるお勝とやら、返り討の樣子迄殘らず聞て仰天し、悔どかひなき其場の時義、早事切し殘念さ、空しき骸を墓地よ葬、此家へ歸り樣子を見れば思ふよ違ハぬ下家

の白刃、敵ゑ縁引お熊が娘、女房去た縁切たと、思ひがけなき夫の詞、聞て惝り、ソリヤ何で〳〵と泣出せば、何故とゝ狼狽者め、剛助が乳兄弟と明白ゑ分る上ゝ片時も添れぬ敵の縁、すつぱりと斷切て、敵討の助太刀せねば、冥途ゑござるは主君へゞ譯か有ふと思ふかコリヤおれだといふて木竹でゝないゝい必を盡した後室樣のは介抱此年月の世帶の艱難、悴めが不便な事迄嚙分てゝおれ共な、邪見お親ゑ縁を引敵が則其身の敵、添ぬ昔と諦めよと大の男が一旦、恩愛不便も顯れて泣ゝゝ猶哀れおり何思ひけん女房ゝ寐入し我子を引寄て、有合出刀を突付れば、後室聲掛ヤレ待お弓、敵の枝葉ゝ所詮の事、それぬ縁と諦めて、我子を殺し自害とゝ尤おがら死るゑ及ゝぬ、筆助ゑ添してやるゝいのふ、ヤ、あなたがお敕し下されまして、ヤ、添してやるゝ眞斯と懷劍咽ゑ突立れば、夫婦ゝはつと仰天し、ヨ何故と左右介抱おろかなかりける手負ゝ涙の聲を上、ヤレ何整

く事か有、草葉の陰の三平へ言譯の使ゝ此母、口惜いゝ悴が横死今十年若けれゞ倶ゝ敵を討ん物老さらばふてなま中ゝ足手まとひゝ、成此身、殊ゝ弟勝五郎、人ゝ勝れし孝心が却て其身の害ゝ成敵ゝ出合其時ゝ母ゝ心が引されて切先なまれゞ家の瑕瑾、實長生ゝ恥多しと抑出立の其日ゝ、王凌が母の功ゝ習ひ、極めたる此身の覺悟敵の手かゝり問方便筆介がすゝめゝ任せ此所へ立越しゝ、冥途の土産の一役ゝ立て仕廻ゞ用なき體、生先有筆助か妻子ゝゝよい替物、敵ゝ縁ひくお弓ゝ死て、殘るお弓ゝ妻おらぬ此寄涙と心得て筆助介抱頼ぞや、去ゝても邪な、親ゝゝ似ざるお弓が深切、耳ゝいたる病人と僞る此身を太切ゝ、せゝしいたつきの其中ゝ親を拘へ子をかゝへし苦勞もいとゝゝず介抱し、雨の日風の夜半迄ゝ何おろかなき志、僞る此身の恥かしさ汗をかきしゝ幾度か心で詫して居たゝいのふ、赦して下されお弓殿といふも苦しき息遣ひ、勿躰な

さと有難き、筆助の頭より大磐石の落くる思ひ、お弓の涙と譯もなく、世と邪見な親を持夫と去れた因果者、身も世もあられぬ悲しさと我子を殺し諸共と死るを極めた此命世と例しないは主人が、私等風情の身と替り、は自害なされし冥加なさ、何とお禮のいひ樣さへ泣て返らぬ此は恩、いつ送らふぞ、コレこちの人とすがり歎けば筆助も、胸と滿くる血の涙、忠義の涙恩愛の涙〳〵の猿澤の池の水倍や増らん老母の涙の顏を上、ヤレ敵討とゝ不吉の涙、片時も此場を立越て我子と早ふめやり逢、草葉の隱の三平へ手向てたもや筆助と、いふもくるしき四苦八苦お弓が悲しさ取乱す、歎きを制して筆助つゝ立、は主人の仇其上と後室樣のは自害、重〳〵恨みのかさなる剛助、勝五郎樣と廻り逢心を合せ本意を遂ん、女房用意と勇立身拵へする其折から、いづくで用意や仕たりけん、鉄炮引さげ立戻り、かしてと固むる火縄の光り透さぬ筆助、行燈ばつたり眞

の闇、どつさり響く二ッ玉うんと斗よお熊が最期ちよこ才すなと欠出すをお弓い引留、コレ筆助殿、寄涙様がは臨終と聞かはつと欠戻り、ヤア〳〵後室様〳〵、こゝ筆助か、めいとで吉左右待てゐるぞや、嵐よ向ふ姥櫻散て、はかなや「定おき

八冊目

君が代を、千代の例しの鶴が岡、八幡宮の鳥居先、雪の下道一様よ、屋敷帽子の花揃へ、神よ願ひのお千度よ、神樂の音も賑いへり、並木の影よ立派の武士、家來引連とくかも見とるゝ戀の下心、何と團助あれを見よ美蓉も及ばぬ美人の粧ひと毛唐人が口号、思ひ合せてたまらぬ〳〵、成程左様でござります、誠の花も及びない今を盛りの初花殿、コリヤ〳〵お旦那が首だけよ、惚さつきたもは尤、下郎めも先刻かの、戀の花見のお相伴、悴めがいきり切て、甚迷惑致しますと、現ぬかして主從が、咄の内も露去らぬ

こなたい願ひの一心不乱、庭の、白砂鳥井先歩むも足の裏若き、ヤ〳〵は寮人様、最そつと静よお廻り遊ばせ、物堅いお屋敷故、外見る事さへならなんだよ、珍らしいは参詣餘りの嬉しさよ、身仕舞もそこ〳〵、えたらくそふな女ぎやと、鎌倉中の殿達よ、笑いれふかと思ふて、ヤ、はもし、えたがけふ一日い天上拔、よい男の見飽せうと、嬉しいぎやおいかいのふお霜、ヤ、小雪の何をいやるやら、叶いぬは願で密のお参り暮る迄居てたまる物か、ヤ、アは寮人様、ヤ、夫〳〵、斯いふ内も心せく、サア、お宮やと先よ立、行つ戻りつお千度の、數も満れば一同よ、伏拜たる鈴の綱引手よ神や靡くらん、新左衛門が娘の初花、顔みたき事有と、木影を出る瀧口上野、夫と見るか初花い遙こおたよ押下り、あおたい瀧口上野様、私よは用とい、いか様お義でござります、と武家の行義のえとやかよ、堅ひ程猶奥ゆかし、コレサ〳〵何を其様よ懇懃よ、先此床几へヤ、近ふ〳〵、其義いおゆるし下さりませ、

我君氏政公のお客分お傍へい憚り、夫から仰下さりませ、イヤ苦しうおい〳〵但上野手を取ふか、コレサ旦那があれ程仰らるゝよ、ほ意を背くい返つて不禮ひらよ〳〵、ヤ〳〵ほ寮人樣、ほ辞退を遊ばす程、ふ隙が入てい内の首尾ヤ、マア〳〵お腰遊いせと、お霜が進めよ初花い是非おく立寄、床几の傍、コレ〳〵初花殿、去年來當地へ參り、新左衛門といい毎々出會、そもじといえ云みえ云みと物語りも致さぬが、幸の所で逢ヤた、見れば八幡宮のお千度、扨〳〵奇特お事、聞ばまだ云号の男もないとやら、大方よい男が持たいといふ願ひでかおでざらふのと、問かけられてもじ〳〵とひよんお出合よ返事さへ、赤らむ顔のうたてさよ、何のマア左樣お事でざりませふ、夫いとも有ほ用といい、いか樣お義でざります、ナラ其用事といい則是と、懷中ゟみ取出し、初花の若樣參る、心を流す瀧口ゟ、何と憎ふい有まいがと、手よ渡すれい、是い又思ひがけもない、ほ座興も殊よ寄、イヤ座興でない大眞實、兼て

な心をかけ、折を窺ふけふの首尾、そもじさへ得心すれば、連歸つて直よ奥様とふか〳〵と手を取て、慕ひ寄程身をちいめ、上野様、父母の赦しもおい不義徒、致す様あ初花でいこざりませぬ、必ず鹿相遊べすあと、投かへすみ手よ取上、返すさへ手よふれけんと思ふよぞ、君よ、捨置す共某が、心のたけを書たみ、ちよつと成共開いてくれと、手を引寄れべふり放し、逃行初花引とらへ、だき付吸付無躰の手込、姫共立寄て、押分んよも女業、傍よたまらず團助い、お霜が腰よ抱付、息も絶々氣い上ずり、たわいやくたいなき折から、奴三千助引連て來かゝる、九十九新左衛門、それと見るな一同よ手の舞足の踏途なく仁躰「崩れし有様を、見て見ぬふりよ打通れば、是へ〳〵と上野い何喰ぬ体諸共よ、床几よかゝる寛怠頻へ、余り憎いと姫共擲く具似やら笑ふやら、去とけなまめく其風情、新左衛門目よ角立〳〵姫共千度相濟だれば、屋敷へ連歸らぬ、神い非禮を受給

いず左樣な猥千万な義でい心願い成就せぬ猥でいこざりませねと、上野樣が、こりゃ〳〵霜、どりゃ何をいふ、サア夫でも余り、是いえたりまたうち〳〵、供をも連ず、ケ樣な場所へ來る故無法の侍無法者ゑ出合ぬ樣ゑ、ナウ早歸れと、目顏のえらせ、呑込でそんならお先へは寮人、サア〳〵お出と引立られ、娘い心三千助ゑ、移らふ色も儘ならぬ、人目のせき立敏ゑ、いざおいれてぞ立歸る、新左衛門い何氣おく、今日當社へ社參仕らふと存たる折節尊公樣がは光來あらんとのは案内故、今朝が相待ゆせし所、當社へは社參と承り、拙者めも直樣參上、よき所で拜顏仕りました、オレバサ、お手前ゑちと賴入度子細有て、先刻まからふとゆつかいしたれ共、ちと内用出來故、此所へ參つたが幸の出會、是い重疊お賴とござる其子細いお、イヤ別義でもおい、關八州ゑ音ゑ聞へし劔術の達人諸流の奥義悉く極おる其方、相傳を受ふと思ふて、是い〳〵何事かと存たれば、奥義傳來のは所望、誰有

ふ主君氏政公の、ほ客分たる上野様のお望、違背仕らん様ハおくしんへ共兵法鍛練の者よてなくぺ、相傳仕らぬが家の掟、憚り多き事あがらほ所望おれぺお手並拜見仕つた上いか様共、へ、こ上野が手並、拜見とハえやらくさい、太功のほ旗下よ有て數度の殊功、其上勇士の聞へ有此瀧口、コリヤ云でも知た事、ウ團助、左様でござりまず、眞釼ハ愚木太刀でも、八の五八や十八ハ唐竹わりよなさる手の内、お望おら幾人でも、相手を出してほ覽なされ、併五八や十八でハ足ないく、百八斗試よお出しなされと身の程えらぬ團助が、主の尾よ付廣言ハ、上見ぬ鷲と見へよける、九十九が供よ扣へし三千助、もみ手おからよ進み出、へッ恐れ多き事ながら、お旦那へ三千助めがお願ひ、何卒上野様のお立合、此下郎めよ仰付られ下されふならぺ、いか計大慶よ存まする、ふ、、、三千助が十方もない事まき出したハ、おらが、旦那と立合ふとハ、湖を えゞめ貝でかい干といハふか富

土山をせしる土龍叶いぬ事だ、及ばぬ事だ、取置、〳〵、成程團助、お身がいふ通り、いかゝも及ばぬ事といえりながら、剛い物見たし五十人百人を物の數共なされぬ、上野樣とお立合ゆ、死る程の目ゝ逢が、此身の執行だ、は身も俱々願つてくれろ、イヤよしゝせい〳〵、死る程おらゝよけれど、ちよつとゝなへでもさいると首が飛、首と思へどなけゝや不自由な、すつ込〳〵ろさ、アイヤ〳〵團助、此上野と立合を願ふ其下郎アゝばらしい心掛なれど、打殺すも余り不便お、ゝ、ゝ、斯致せ〳〵、其方立合、心がけを少々教へてとらせい、何と新左衛門此義い、どふ、有ふ、是い至極面白い思し付、併途中なればゝゝへの用意が、イヤ幸〳〵繪馬ゝかけたるアノ木刀三千助是へと即坐の氣轉、つと立寄寶前ゝ掛奉る木刀を假の、ゝなへと直し置、提緒襷ゝ三千助團助、心を配る互の身構へ、ゆしゝしくも又潔し、滝口九十九い片唾を呑、見やる折から吹送る、風が持來る鼓の調、時ゝ相生兩人が、ヤッと掛聲虛

虚實々、ヤア〳〵と互の呼吸、互よかつ去り透を見て、先を取んと心の鍔手を盡してぞ「いどみけるあしらひ兼て團助が、木刀からりと卷落され、面目攝ハず逃行跡、無念の上野欠寄て、いらつて打込む眞劍を、刀向よ受たる太刀捌、開いてはどけパさつと引、又打かける獅子分身沈んで拂ふ虎乱入透もあらせず飛ちがへ、込手なく手も、手練の太刀筋、心得ぬ此備へハ飯沼流の棧此手を覺へし其方ハと、見おろす面躰きつと見上、またたきもせず双方が、胸よきつくり互の合紋、扨ハ〳〵と驚く有樣、つか〳〵と新左衛門左右へ引分三千助を、持たる扇ふり上て、丁〳〵はつしと打すゆれパ、ハッ〳〵と斗恐れ入、白洲よ低頭なしよけり、新左衛門はつたとねめ付、未熟不鍛練の手の内を以て、太切成客人よ刀向ふ下郎め、身動きせパ手ハ見せぬぞ、イヤ〳〵新左衛門、其下郎め適の手練、正敷一物有不敵の曲者、アイヤ眼前ハどふやら素早く相見ゆれど、何流共定らぬ未熟の手の内、高

の知た匹夫下郎、何一物がござらふや、驚入たい尊前のは手練、奥床しう存る、さ、左程實意ゑ感心ならぺ、望かゝつた奥義の傳授を、其義い所存もござれば追ての義、日も早傾むけぺ先お暇、然らぺ新左衛門、上野樣と、互ゑ禮讓式禮目禮萬事を胸ゑ新左衛門、三千助引連ゑづゝと、屋敷をさして立かへる、跡見送りて上野が、心へぬ飯沼流を鍛練せしアノ下郎、慥ゑ敵〳〵と思案ゑ入相の鐘ゑ輝く神燈の影も霞や

九冊目

花も雪も拂へぺ清き袂かな、ほんゑ昔の昔の事よ、我待人い我を待けん、太平の時ゑ相生琴の音ゑ、峯の松風通ひくる風流工む家造りい北條家ゑ聞へたる、九十九新左衛門が一搆へ、武士の心の奥書院住居清げゑ見へゑける、庭ゑ奴の三千助が掃除の役も打忘れ、琴ゑ聞入餘念なく、彈い〳〵、世ゑ有る人の嘸面白く聞給い、我等が樣ゑ落ぶれてい、誰問人も

夏ハ布、冬ハとんざ一枚の寒さを凌ぐ八文酒、同じ浮世ゑ同じ花、雪と見るのも一興だと、一盃酒ゑ現おく手桶ゑはう杖水際ハ、すつぱりとした奴なり、襖をそつと姐の、お時ハ心とき〳〵と當り見廻三千助ゑ、抱付たさ手ももぢ〳〵もちつく後ゑ窺ふお霜、お時ハいつそ、てんぱのかハと抱付ハ、ぱつと飛退顔打詠め、誰かと思へバお時様、コリヤ三千助をおなぶりか、イヤなぶるのじやない大眞實、とふからわしが思ハく男、ちよつと部屋へと引ぱる手先、お霜ハ押退、ヲ、あつかましい、三千助殿ハわしが先、此間からくどいてゐる返事を聞ふと引ぱれバ、そふハあらぬと押退て、すれつもつるゝ藤かづら、ほう〳〵逃るを逃さぬ二人よい、中同士も先手後手、互ゑつのめ立別れあなたこなたへ、引合後物騒がしい何事と切戸を出る娘の初花、見るより悔り姐共そゞやこそやバ、しやと手持おく、一同ゑばつと立鷗、尻こそバゆく三千助もそろ〳〵部屋へ、コリヤ〳〵不義者待、自が手

廻りの女共疵付た不埒者、手討よするとと提たる一腰拔手を押へて、御密人樣、めつたよ指い切しませぬ、三千助何と、妙衆よ言付、此三千助を、口説かして格式を破つた猥者、手討よするとお拔なされた此刀で、指を切て奴めよ、いやと云さぬ戀のわな、ゝ心底い有難いが主と家來の色事い、せゝなげよさす月影、足踏辺だら泥だらけ、浮名い一生洗いれませぬと、突放されて初花い、戀のてよはをもぎだふな詞よ猶も慕ひ寄、恨しそふよ袖ゑつと、扣へる樣子を立聞母、思いずふつと三千助が、見合す驚くはたとさす、生死よかゝる身の大事袖ふり切て逃行を、のふ是待てと呼聲も、届ぬ戀の恨めしく、見送る目さへかき曇る涙の雨の振の袖ゑぼり兼たる折からよ、瀧口上野樣のゝ入と、ゑらせの聲よせひなくも去ほ〳〵立て奥よ入蟹い甲よ似せて穴をほる、心い甘き佐藤剛助、氏政よ身を寄て今瀧口と鉄倉よ、虎の威をかる時の權、近藤岸田の兩人引連書院先よ

ぞ打通る、新左衛門出向ひ、是い〳〵お客人始、お歴々打ち揃ふてよくぞ
に入來、ソレお茶持と饗應ば、イヤ〳〵九十九氏構ひ召れな、今日近藤五郎岸田
半左衛門、両人同道よて參つたい、ゆ入度子細有て、コレ両人演説召れといふ
尾よ付、近藤五郎進み出、今日我ゝ參つたい、息女初花殿の義、去貴人よに
懇望の事、此半左衛門度〳〵ゆ入るといへ共、今よおいてに返答なき故、今
日い是非有無を承らふと両人共伺公仕つた、是い〳〵何かと存じたれば、
娘が縁談の義、に苦勞千萬、最早時分の娘、どふで一度い聟がねをと存じ居る
折からなれど、兎角い先の相手次第左樣なら我々が詞を立いかよも遣いさふとゆまい
物でもござらぬが、達て娘を御懇望おさる貴人といふい、身共でござる、イヤ此瀧口でござる、
娘が縁談先の相手次第と有が、聟よ取て不足のない此瀧口、太功よ高祿を給いる直人、恥しからぬ
氏景圖、兵法の印可諸共、所望がまたい、是い〳〵誰人かと存じたれば

上もない太功のお直人、倍臣の新左衛門風情、智兼とい冥加至極もない仕合、上野殿娘を迎へ下さるゝお屋敷いいづくでござるな、婚禮い人の大禮、其昔い太功のお直人でも、只今でい主人氏政公の掛り人、俗よゆ天竺涙人、此方よ望よおいと、ずつかり云れてせき立瀧口、刀するりと抜放し、目先へずつと差付て、善よもせよ、悪よもせよ、云出した事ひるがへさぬ身が生得、娘初花が結納の生肴、再び鞘へ納るか納めぬか、只一言が生死の境だ、新左衛門どうだ、ハヽヽ、鍛よ鍛ふた正宗でも、不鍛練の者が帶すれば なまくらも同然、城州伏見よおいて好色の意恨よ飯沼三平を欺し討よし侍らしく切腹でもする事か、仇討を恐れ姓名を變じて逃隱る る比興者、女さへ見ずやびろ〳〵と、我娘を無躰の望否といへば討果すと引拔た錆刀、新左衛門が身よや立ぬ、馬鹿盡さずと早歸れと、飽迄嘲哢瀧口い、もふ是迄と切付るを、ひらずとかいし其儘よ、腕首掴んで去め付

れば、身内よひつたり玉の汗、かゝる未熟の手の内で、兵法奥義の傳授抔とい片腹いたし、眞二ッよなすやつなれど、客分と有主君へ對し、此儘よて赦し歸す、有難いと三拜せよと、突放されて上野い、無念面よ滿たる吐息、此返報い新左衛門、重ねてきつといふぞよと、刀を鞘よ納めた顏付兩人引連立歸る、奥方早厥走出、心よからぬ娘が緣談、どふ成事と氣遣ひしよ、心地よい今の逝ぎさ、併なんぼう悪者でもお客分の上野、只今の樣子をば、ま、譬言上なしたり、迚、非道の振舞、何程の事、左樣な義を案じず共、時分の娘捨置ば得手い ケ樣な虫が入、一時も早く祝言の用意を仕やれ、ま、何とおつしやる、是迄諸方の大身ゞ望まるゝ娘初花、家をつぐへき男子なけねば、外へい嫁せぬとおつしやつたあなた、まだ聟兼も定らぬよ祝言をさせいといな、ま、不審い尤其子細いと立上り、桃の一枝折取て、聟ゑい此一枝、今宵の内よ祝言さす思案を仕やれと投出す、夫の心の判字物

とけぬ思ひよ奥方ゝ、花を詠て取つ置つ工夫よ時をぞ移しける、折から仲間罷出、只今氏政公よお旦那を急お召早く〳〵出仕有べしと云捨跡へ引かへせば、扨ゝと斗奥方ゝ案じよ心やるせあく、心得ぬ急のお召、大方今の上野が、何の〳〵いか樣よ言上なす共、ヤ開きゝ胸よ有、案じず共其方ゝ、花の祝言急ぐが肝要、我ゝ直樣出仕せん、姚共上下持と騷がぬ大勇、はつと答へて一同よ運ぶ、上下大小も、立派よしやんと改めて、出行姿見送る氣遣ひ、花も同じく解やらぬ、辛苦を胸よ押包、左づ〳〵奥へ入跡よ、人音絶れば物陰よ、ぬつと出たる奴團助、邊り見廻し立留り、合点のいかぬ三千助が素性、新左衞門が花の謎ゥと思案の奥深く、窺ひてそ忍び入る、櫻山吹色々の、草花の盛り幕ひくる、蝶の番ひの、妹脊鳥あなたこなたへ、飛こふ有樣、障子開いて娘の初花、やゝ見とれしが涙だぐみ、庭よ飛こふ蝶さへも、番の女夫ゝ有物を、ほんよはかない此身の戀路、三

千助がお宏やつてから、可愛らしいいとしらしいと思ひ初、心の、たけを書盡し、雨の降程やるみよ、たゞの一度も返事せぬ、物堅い氣よ增輪廻、思ひよやつれ戀よ病、疲たゝ目よゝからぬか、むごい男と一筋よ、戀の三途よ踏迷ふ娘心ぞ便なけれ折からあゝてゝ必共、ヤし〳〵御寮人樣一大事が發こりました、コリヤ亂騷ぎでござりますと、口〳〵いへゝ驚く初花、けたゝましい大事といや、ナア大事所ろか、いつの間よやらあなたの聟樣がちやんとさだまつたそふで、ゼ祝言ゝ今宵じやとお臺所ろゝとつさくさ、ナア〳〵何んといやる、そんなら今宵祝言を、そりやアとゝ樣も嘸樣も得心かいのふ、得心の段か何ことも皆な奥樣のお指圖と、聞くよりはつと胸せまり嘸樣も聞こへませぬ、私が心よとの樣お、深い望が有ふやら、たつた一言とふせうと、なぜ問てゝ下さんせぬ、此身の願ひも打明て叶いぬ時ゝ死ると迄、思ひこんだ三千助ゟ、外の殿ほと寐る事ゝおしや、

いや〳〵〳〵と娘氣よ思ひつめたる懐劍を見るより悔り嫉ども、是ハは短慮ニアお待と、留めても留まらぬ。「ヤ〳〵〳〵、赦して殺して〳〵」と、たよりいちからも極る一念持て余してぞ、見へよけり。「ヤレ娘早まるまい、そなたの願ひハ叶ふて有ると、いひつゝ花筒携へて、一間を出る母の顔、見るより悔り摺寄て、かゝ樣私しが願ひが叶ふたとハへ、娘そなたの願ひハ、三千助で有ふがの、ヱ、下賤ながら見所有三千助、奉公よおじやつた時から、思ひこがるゝそなたの戀路、親じや物ゑらいでならふか、言ねと母が心ハ千〻、てゝ御へ願ふてどふしてと、思ふた心がひつゑりと、此一枝を謎よかけ、今宵の内よ祝言させいと、お渡しなされた此桃ハ、其子爰よ歸といふ、唐の嫁入の例を引、東方朔が壽の、桃ハ三千年三千助とおかけなされた詞の謎、人品と云劔術迄、勝れし器量ハ中〳〵よ、五百石の聟よして何不足ないゝ三千助、親が赦して今爰で、祝言さしてやるハいのと、

粹な捌の母の慈悲、始の歎き悦びと、打てかいつていそ〳〵うき〳〵、何と譬へん嬉しさの、谷の戸出し鶯の、梅と初音の心地せり、姚共いぞく〳〵と、是からの天井拔、よい事よの寸善尺魔、早ふと騒き立運ぶ、長柄の蝶花形、比翼の契り、かの島臺、尉と姥とよあやかりて、髪も、白妙白小袖、丸綿帽子さばゆくも、母も曠着の、襠姿、早改まる座敷の体、想、差圖よ姚壁よ、三千助殿召ます、と呼次聲よ三千助の、俄のお召何事と、白砂よ出て蹲る、母の聲かけ、苦しうあい近ふ〳〵、ハッ〳〵、我〳〵がヶ樣の姿、嘸不審よ思やろが、兼て娘が必を盡し、樣〳〵と口說共、猥なき神妙の振舞、殊よ此家よ男子迎もあらざれば、是非〳〵養子せよやあらぬ、器量有そなたの事、夫新左衛門殿も得心なれば、今宵内祝言取結び、娘とも睦じう九十九家の相續を頼まするとの有ければ、三千助はつと兩手をつき、有難きは仰、併由緒も定かならぬ私、忝くも北條家よて、は大身の九十九新左衛門樣の

は世繼とゝ憚り多し、此義ゝは免下さるべし、と辭退の詞ゑ、イヤ〳〵鼻下するも事ゑ寄、此方から敕す祝言、違背ゝ却て不禮で有ふ、ハヽアは意重くゆへ共、是ゑゝ樣子でゞりますれば、此は祝言は受がいゆがたし、ムウ樣子有とゝ心得ぬ、云号の女房でも、古郷ゑ有と云事か、イヤ全く以て左樣な義ゝ、然らば五百石が不足おか、コハ勿体ない仰事、中〳〵以て不足おとゝゆ義ゝ、そんおら何故此祝言、違背仕やるぞ、サアア夫ゝ、サアア何とゝ母親ゝ、顔ゑ紅葉の色直し、只事おらずと、見へければ、娘ゝいかゝ成事やと、あおたてなたを思ひやり幾瀬の思ひ妙共、どふやら風が替つて來た、ひよんな事やと、投首し、皆一同ゑ立て入、三千助ゝちつ共億せず、奥樣のは意は尤ゑゝゆへ共、此子細斗ゝ譬一命を召るゝ共明し難し、何卒此義ゝは用捨と、思ひ切たる返答ゑ、娘ゝわつと泣出し、是程迄ゑ身を盡し心をつくした憂戀路、只朝夕ゑ父母のは機嫌斗案じたゑ、祝言さそとのお詞ゝ、夢か現と悦ん

だ、其かひもない此ゑだら、せめて斯いふ入譯じやと明していふていたもらぬぞ、得心をゑた其上い、夫を土產よ今爰で死で苦悩を遁るれど、やつぱり輪廻よ引されて花の臺の未來でも、迷ふいいのと、打伏て、歎けば母も涙よ暮、命を捨ての娘が戀路、是程迄よせまつた義理、鬼でも蛇でも聞入て、得心せねばならぬ場所、夫を氣强ふ此儘よ、未來よやつたら嘸や嘸、さいの河原をうろ〳〵と迷ふ娘がいぢらしい、此世の縁が叶いずばせめて未來の盃を冥途の旅の餞別と、思ふて始終の入譯を、明して下されい三千助殿、コレ〳〵、主が家來よ手を合せ拜むいいのと取亂し、涙くり出す親と子が、心の內ぞせつなけれ、ヤア〳〵三千助が心底聞よ及ばず、主命背く人非人、成敗せんと一間を、いつの間よかい新左衞門、手遣引提、立出れば、親子い驚き取縋り、仰置れた娘が緣組得心せぬ、三千助、憎いやつじやとお怒りいば無理ならねど、われ程迄思ひ詰た娘よ免じ、ずとゝ樣一

向ふ、に宥免をと左右縋り詫るを振拂ひ、白砂ふ飛おり三千助目がけ、突かくる鎚先を拔つくゞりつ手練と手練、得たりや大身なつしぐら、風の薄ふ蝶鳥の、ひらめく有樣ハテ〳〵と、母と娘ハあやぶむ中、驅首むんずと三千助が、九十九が面体打守り、ホ、北條家の家臣ふおゐて、四海ふ聞へし神影の達人、心得ぬ鎚先の狂ひといひ、呼吸の息のせハしきハ腹切てでざらふがのと、大地を見拔明智の眼力、新左衛門驚き入、ハ、ア胸中の夜光の珠、いか程包隱されても、光りハ自然と顯ハるゝ、飯沼勝五郎元治殿、包まず俗性明されよと、鎚投捨て新左衛門、尻居ふどつかり諸肌脫ぺ、腹一文字ふ切たる上、くる〳〵卷たる白絹も、から紅ひふ染たゞる血汐、何事と母娘、おいてふためき轉ぴおり取付歎けぺ勝五郎、つか〳〵と立寄て、疵口とつくと、ホ、滴〻、最早此世ふおき人ふ、包むふ及ぺず云明さん、いかふ貴殿推量の通り、某こそ眞柴太功久吉公のハ筆下、飯沼三平が弟勝五

郎元治、佐藤剛助が爲ゑ兄を討れ、其無念止難おく、六年以前本國を出しより、目出度本意を達せん念願、去ゑ寄てもだし難おき息女の戀慕、餘所ゑ見たるゐ此譯故、まつた敵剛助ゐ、氏政ゑ所縁有事南都ゑて相分れぺ、我ゐ早ゑ此地へ下り、面体ゑらぬを幸ゑ、下郎と成て當家へ有付、客分たる瀧口上野、敵ゑ似寄の人物故、とくと實否を探らん爲、此間鶴が岡ゑて望し立合、我打太刀を飯沼の、棧おけと知たるが敵の手がゑり、若けどられてゐ一大事と、心を碎く某を、飯沼勝五郎と見極め、切腹有し其子細ゐ、夫こそゐ道の德、貴殿のゑおへの進退ゑ飯沼の舍弟とゐ、鶴が岡ゑて見極たれ共、態と氏おき下郎と云伏、敵ゑ油斷をさせんずと、心を配るゑ其以前、我武者執行ゑ出し時、貴殿の祖父三左衛門元勝殿ゑ仕へ、劍術の奥義殘らず、相傳受し松並主計其方ゑゐは存じあらねど、我ゐ覺への稚顏、仇討の爲斯迄ゑ、下郎と成て艱難辛苦、勞ゐしさよと思へ共、北條家の

祿を喰某、うかつゑ大事も明されまし、と緣組を云付しい、當地ゑ足を留ん爲、又一ッゑい娘が戀路、叶へてやりたい親の闇、心を碎く其内ゑ早、氏政公の上聞ゑ達し、今宵の中討捨まと、重き主命蒙れ共、討ゑ討れぬ先師の流れ、左あれば迚見遁してい主君へ不忠、二ッの恩義ゑ身一ッを分て賴い、娘が身の上、いづれの地へも相具して、不便をかけてやつてたべ黄泉の障りい是一ッ、と跡云さしてむせかへれば娘いいつそ正体おく、此年月のは養育、は恩も送らずうかゝ、と身の徒ゑ盡せし不孝、お呵りもおく其上ゑお腹迄召私が戀、叶へて給いる冥加おさ空恐ろしい勿体おいチ、さればいのふ、けふいいか成悪日ゑて思ひがけおき此お別れ、斯いふ事とい露ゑらず、器量發明揃ふたる娘が好た聟を取、初孫の顔を見て祖父ゑ、祖母ゑと云れふと、樂しかひもおふ皆むだ事ゑ成たかとくどき歎けば娘い猶、涙の限りせき上く、あおたい覺悟のは最期でも、跡ゑ殘

りし母様や、私ゝ何と成物ぞ、どふした薄い親子の縁はかゝい別れと取付て、わつと計ゝ取乱し、絶入歎き飯沼も、齒をくひゝばり諸共ゝ汲取涙諸涙限り白洲も、海となり潮、滿くるとくなり、勝五郎涙を拂ひ、祖父の好みゝ命を捨、危躯を救ひ給ゝる恩義、息女ゝ某ゞ請友白髮迄添果ん心おきおく臨終有、せめてゝ息有其内ゝと、嶋臺手づから取かゝす、名ゝし長柄ゝ母の役涙の介添、つゞ數も三々九度の未來の餞別、迷ひの雲も打晴て、痛手も忘れ悦ぶ手負、飯沼はつと心付、歎きゝおくれ遲滯せり俱不戴天の敵の有家、分明ゝ知たる上、本意を達すゝ今此時、是ゞ直ゝ馳向ゝんと勇立たる其骨柄、九十九ゝ制して、イヤ〳〵心はやるゝ尤ながら、貴殿此地ゝ入込事、敵ゝ知たる其上ゝ氏政公ゞ加勢有其中へ、只一人切入ゝ飛で火ゝ入夏の虫甚以て危ふしと、諫めとゞむる其折から庭へ群くる紅ひの蝶を、をたふて白き蝶、勢ひ込で、飛來り、無二無三ゝ喰合ありさま、飯

沼きつと打見やり、怪しや蜂の戰ひ蛙の軍和漢よ數多見聞すれど聞も及ばぬ蝶の合戰蜂蛙の例よ習ひ、四海の奇變を顯すか、イヤあれこそ貴殿の身の上、赤きい平家北條方、血筋よ緣引上野よ、氏政公が助けの人數白きい一騎源の、其末葉たる飯沼氏、勝負の有樣今目前、自然と顯す前表ならんと、眄きもせず見やる中、赤きい白きよ喰立られ、負色見ゆれば母娘、勝た〳〵と悅ぶ内逃れい跡より入替りうづまき來るを事共せず、ひるまずさつと喰合時しも、さつと吹來る嵐よ連一度よぱつと散亂せり見られたか元治殿白きい勢强しといへ共、赤きい次第よ彌增猛勢、勝負の時よ有ざる事、天が告る占成ぞ、ハッ〳〵〳〵夫こそ誠よ肝要たが、天の時い地の理よ考かず、示しよ隨ひ此地を去、時節を斗つて本意を遂ん、ホ〳〵〳〵時刻移らば洩聞へ、討手來らば事むづかし、此場を早く立退れよ早く〳〵と氣をせけど、殘る方なき恩と義理、立端よ迷ふ涙の別れ路、更よ果しも

なき所へ、小陰をぬつと團助が、聞た〳〵と顯れ出、飯沼目めがけ切込をひらりとかわす飛鳥のかけり二打、三打打合す刃わ稲妻から竹わり、天晴血祭り早目出度出立、さらば、おさらば、さらば〳〵と飯沼夫婦、眞が哀れ跡よ見て其儘、立か弓取の譽れわ高き箱根山武名わ、後よゞ聞へけり

十冊目

されば飯沼勝五郎元治わ敵をねらふ年月も、天命薄く病伏て、身わ腰拔と成衰へ、さまよひ來る奥州と下野の國境よ所の者の情よて漸結ぶ小家さへも、早物經て雨露を防兼たる風情え、妻初花わ、一日も思ひ忘れぬ看病の、藥鍋さへ土竈、煎じ上れば茶碗ようつし、勝五郎樣お藥が上つた其樣よ寐て斗ゐるもお毒、ちやつと呑をやんせと、いふ其聲よ莚戸押明、イヤ〳〵藥わもふ呑まい〳〵、アレめつさふな、そんな不養生な事が有物か

いな、コレお前ハ大望の有身ぢやぞへ、サア其大望ハ忘れねど、何といふても此業病、そなたを連鎌倉を立退、下野の久我ゑ留りし夜ゑ計らずも大病、人事も分ず其時ゑ死る命、そなたの看病と人參のお影で、命斗ハ助かれ共貯へゑ盡果終ゑ夫婦が乞食と成、あそこの森爰の堤で、五日十日寢臥せし内、長煩の上冷入て躄と成たる、口惜さ、敵上野ハ取ゑ足ねと、北條氏政加勢すれバ、關八州が助、太刀も同前、足腰が達者でさへ容易ゑ討れぬ兄の仇、此樣ゑ躄と成たれバ何と本意が遂られふ、力ゑ成筆助ハ生死も知ず、よく〳〵神佛の冥慮ゑも盡果た此骸、冥途ゑござる兄じや人嘸ふがひのふ思されふと、思へバ胸が張さける、所詮天運ゑ盡た勝五郎、腹かつさバいて死ふと一心定たれバ、もふ藥ハ一滴も呑氣ハないと、齒を喰ゑばり泣けれバ初花はつと涙ぐみ、ジリヤアア何のこつちやいな、夫程迄ゑ口惜い兄ぢの敵も得討ず、やみ〳〵と腹切ゑやんしたら冥途ゑござる兄

ほ様が、悦べ玄やんすかへ、よもやお悦びいなさるまいがな、其様なあほうらしい埒もない思案を仕かへて藥を呑て本腹して傍やれ、敵を討ふとなせ思ふてい下さんせぬ、お前一人を力の私、夫を先立何と、ヤア跡よ殘つて居られふか、思案仕かへて下さんせと、袖よ取付縋り付わつと斗よ泣居たる、妻の貞心骨身よ玄み、勝五郎涙をとゞめ、今のいおれが思かつた、もふ〳〵堪忍仕や〳〵泣きやんな〳〵、そんなら思ひ留て下さんすかイヤモ足い立ず物事い心よ任せず、余り胸つぼらしう成て、夫で終らつちもない思案して退たゝゝゝと果い笑ひよ移り行、日影よ急ぐ人の足通りと見るかい立妻、夫い莚戸引立て早入相の暮の空、三ヶ日清く登りける往來も多き其中よ目よ立男い此かいいい、七ヶ村の庄屋代官溝口と云高なめ者、供い連ねど帶刀よ威勢振てぞ行過る、跡から付て、ヤ且那様、ほ慈悲よおやりなされて下さりませ、イヤ付おゝ〳〵といひつゝ非人の

顔詠め、ヤア我ゝ乞食か、ヘテ勿躰ないと、見とれる早惚ヘア扨ゝ評判の有躰のかゝじやな、噂ゝ聞て居れど斯斗のほ面像とい、さら〳〵以て夢以て去らなんだ〳〵、コリヤわれあらそつちからやれといいでも、こつちからやる氣去やゝいやい〳〵、幸日ゝ暮かゝるァ森かげで何とやらす氣ゝないかいやいと、去なだれかゝれゞア、ヤ此手をお放しあされませ、むさふございますいな、アイヤずんとむさふないのむさからぬ證據ゝ是だ〳〵、エ、モあたきたあい人の手を、ソレてつちゃ其方ゝむさがるであいか、コリヤもふなめぬ〳〵、どふぞほ手を眞一度借てくれさ〳〵、エ、うるさいと逃退をどつこいならぬと無理無躰、抱付溝口其儘ゝ腕首去め上どつさりと親の讓りの神影流小氣味よくこそ見へゝける、アイダ、ヽイどふ乞食め、傍ゝやよふ投おつたな、めつさうな今のゝ本の怪家のはづみ、あなたが石でヤどこへ石、七ヶ村の支配する溝口源左衞門、乞食女ゝ投られてゝ面が立ぬ

夫へ直れ手討よするとさつぱ廻せば、ア、ヤ、私が悪けれバ、幾重よも誤ります、イヤ誤つても了管せぬ、ならぬ〳〵と詰る程猶強ふ成悪者根性持合したる其折から所の庄屋徳右衛門、怪しの車下部よ引せ出來り、夫と見るゑヤ是ハ誰かと思へバ溝口様、何やらに立腹の躰でござりまするが、此女めが不禮でも致しましたか、イヤ不禮の不禮でおいのとヤ様おの段でハない、此源左衛門を土邊へよへ込程投おつた、夫ハ、ヤア怪らぬ事、ソリヤ又何故でござりまするなヤサア夫ハ、どふした譯でござりまする、イヤヤ夫ハ〳〵、チ、そふだ、此源左衛門此所を通りかゝつたれバ、アノ女めが乞食の分際で、拙が色香よおづみしやら、ヤ旦那様、おしひよおやりおされて下さりませ、おやりなされて〳〵と付迫る故、イヤ付な〳〵といふ物の其うづかちかさしやおいきたなさ、身共よ抱付吸付、イヤ、エそりやあおたが、イヤとやつあおたがといけちぶといいかようぬが戀を叶へぬ迚、手の、ゑびれる程ゑめ上

てよくも身共を投たなそりや逆樣といふを云せず、德右衛門、アヽコリヤ譬どふ有ふが最よい云な、夫でもわなた、ハヲ扱善惡い人の目が鑑、見す〳〵とい德右衛門承知あれ共、コリヤ此お人い七ケ村を預る溝口源左衛門殿、當村もやはりは支配なれば殿樣も同じ事、不禮致すとわれが男の譬諸共、此所よい住れぬぞよ、エヽ、夫じやよ寄てわれが方から致しかけたが惡い、サテ誤れ〳〵、イヤ〳〵德右衛門、アノ女いざり諸共此所をぽつ拂ふて仕廻やれさ、ソリヤ又何故、源左衛門よ不禮致した見せしめ、以來の外聞よも相かゝるいい、サテ以來のは外聞よかゝりまするよよつて、今日いは了簡あされずば成ますまい、ナセ〳〵、さればでござります、七ケ村の支配なさるこなた樣所よ、狼籍者でも有ば、直よ召捕てお出しなされよやあらぬ役義ヶ其役義を勤る源左衛門殿が、女の非人位よ投られさつたやつたとヤ沙汰が有てい、何とやらは外聞よかゝりそふな事かと存じまする、此樣子を存

した者ハ徳右衛門一人、じやあよつてコリヤ穏便あにて了簡あされずバ成ませぬまい、アレちやつとお詫ヲせ〳〵、と目で仕方同じ庄屋でも雪と墨おこる非道を打明ていふてハ夫の難義ぞと、誤る手あもはら〳〵と無念の露ぞ置あける、徳右衛門取持て、アレ〳〵誤つておるに了簡なされませ〳〵、いか様了簡致しあくい所なれど、其方がヲ通り、外聞あ相かゝれバ赦しくれふが此後其が通る時、びろ〳〵と小指でもさゝバ此所あハ置ぬぞよ、イヤモフ男のよいのも去とハてまつた者だ、辻かい本で得手ハケ様お迷惑な事が發るて、ゝゝ、ゝいやもふ世界あハ身を去らぬ者が澤山あござりますて、そふさ、非人風情の身を以て、何だ其顔何だ、まだ去やうこりもなく、ヱヽ、思ひ切ぬか、バテよふござります、人が參れバ不外聞、サアお歸りと徳右衛門、詫る詞あ溝口ハ睨付たる猿眼、胸ハ一物初花あ心殘して立歸る、跡見送りて初花ハ、いかあ零落たれバ迚、主有此身あ胴欲なまだ其上あ手をつ

いて、誤りましたといふ心、ほんに悔しい口惜しい、と身をふるゐして泣ければ、尤ぞや〳〵、源左衞門が邪とは、來るか早ふ見て取ど、いがめられぬゐおれより上役、あんな奴に出よふたが不覺、堪忍しや〳〵と、宥る中に勝五郎小屋の内かいざり出、是ゐ〳〵徳右衞門樣、只今の樣子を見請、もふ出よか〳〵と存ずる所へ、あなたがお出下さりましたゆへ、差扣へておりました、段々のお取扱ひ、有がたふございます、扨何の禮に及ぶ事、物ごとをもつれぬ樣に捌くが所を預る役目、ヤ夫ゐそふと肝心の用が遲なつた、ゴリヤ權助其車爰へ〳〵、ゴレ躄殿、此車ゐこなたへ進せる程に、是に乘れば兼々行たいといやる、鎌倉へでも又どこへもいかれる、どふした緣やら女夫連で、さまよふてござつたつまはづれ、よし有人じやそふなが不便な事じやと、所の者に言付爰に小屋をこしらゐせ入て置たが、中にゐ邪見な者が有て、あんな躄ゐ所の役害、うせたらばぼい拂ふとゐ

せいで、庄屋殿もよい太郎作ぢやと、譏る者も有と、善根をさらぬ者共らじやと、何事も聞ぬ顔、ふれが眼の黑い中に、いつ迄も置てやらふとに思ふたが、コレこなた衆に敵討でにないか、エヽ、イヤサ古郷に山城の伏見で有ふがのと、言れてはつと驚く顔、扨にと呑込コリヤ權助、我よりもふ用にない、先へ逝〳〵と追やり傍見廻して、こおたに飯沼勝五郎お内義に初花といふ人ぢやの、ヤヽ、夫おら隨分用心さつきやれ、今朝地頭から呼に來て、此二人の者に鎌倉の北條氏政樣から、繪姿迄廻して嚴しいぼ吟味、此德右衞門も思ひかけにないけれど、平生乞食位する人でにない、若や敵討ヤア敵討でに有まいかと、取て戻つた繪姿を、見れば見る程、似て有面影、最負よ思ふおれが氣でに、去迚に氣ならぬ、若そふおら二人ながら、此國よ居るにわぶおい〳〵、といふても身の自由よならぬこおた、そこで此車を拵へて來て進せた、雨露凌ぐ屋根も有、コレ械も添て有ぞや、内義よ引して

漕でさへ行ゞ唐天竺迄も行れる、ぱた〳〵する事ゝないけれど、さゝよふ勘辨して見やゑやれと生れ付ての情ゑり、慈悲善根も行屆く、心其身の德右衛門、夫婦ゝはつと頭を下、重々のゝ深切、ゝ推量の上ゝ何をか包かん、いかゑも某飯沼勝五郎と申者、本國城州伏見ゑおいて、佐藤何某ゑ兄を討れ、其無念やみがたなく、國を出ての艱難辛苦、ゝ推量下さりませと、夫の詞ゑ、初花も付添私ゝ女の身力ゑ思ふ主の身ゝ腰膝抜て躄と、成やつれたる夫婦が流涙、貯へゑ迄盡果て舍り定ぬ旅の空、果白川の陸奥ゑ、さまよふ二人が身ゑ餘り重ね〳〵のゝ厚恩、死でも忘れゝ置ませぬ、と伏拜む手ゑ置露の涙ゑ誠顯ゝせり、德右衛門夫婦を制し、コレ彼是いふ内もふ初夜過、おれもいんで休みませふ、左樣ならお歸りあされますか、私も品ゑよりましたら明朝發足、夫ゝ何共名殘惜い、コレそんなら二人共隨分達者で、あなたもおまめで、緣が有ゞ又重て逢ませ、よと、庄屋風情でも

仁徳に、自然と備はる徳右衛門我家をさして立歸る、跡より夫婦に手を合せ、影見ゆる迄見送り〳〵、同じ人でもあの樣よ、何から何迄心を付、仁心な人も有、夫より引かへ上野め、氏政が虎の威を借此奥州の果迄も尋扨す極重惡人、敵討つよりも自由に叶はず、思へば因果の身の上じやな、アレ又其樣な事いはしやんす、お前の病氣直さふと箱根の權現樣へ私が願込、其ほ利生で今の間よ、ついに本復をさしやんせふ、コレきな〳〵思ふて下さんすなと、夫思ひよ色かへぬ操の松の雨やどり晴間に更よなかりけり、勝五郎氣を取直し、ハアゴリヤ月が入たやら眞黑よ成た、併今の咄の樣子でも、翌日の所をかへずに成まい、ムウ相州箱根に東海道の咽首、敵を討よに究竟の切所、定て筆助迚も某が有家、方〻と尋おらん、夜が明次第發足せふ、德右衛門が情の車、爰よ置ば往來の妨、小家の後へ引込でおきや、アイと返事も世の中に、憂事有ばよき事も、廻り車を引て行、かゝる折から最前の意

趣かあらぬか溝口に、數多の百姓連來り、闇夜よ透してコリヤといふが百姓共、躍をめがけ一同よ、むらがりかゝるを事共せずばらり〳〵と投退る折から主人の御行衛尋來かゝる奴の筆助、此体見るが何事と、猶豫こなたよ勝五郎大きよいかつて、何やつおれぞ此狼籍、儕正敷氏政公がお尋の、飯沼で有ふがな、女房めが手並と云、合点行ぬと立歸り、配府を見れぞきつゝりと、合たがうぬが百年め、コレ百姓共、猶豫せずと引くゝれと聞より又も飛かゝる、樣子知ねぞ筆助に挑灯投捨飛込で、めつたやたらよ人礫、天狗礫よ百姓共、いざりが立たか何じややら、譯に云れねと烈しき手並、コリヤ叶にぬと一同よ、むら〳〵ぱつと逃ちつたり、殘る筆助只一人、さぐる、足元透し見て、そこよ居るに初花云やないか、イヱ〳〵私に爰よおりまする、今のに何でござんしたへ、イヤあいつに宵の代官め、配府よ合して我〳〵を、ヱヽ、と驚こなたよ聞耳立、そふおつゝやるに若旦那、勝五郎樣でに

でいりませぬか、そふいふ聲い筆助でいおいか、若旦那ででいりますか
いやい、筆助かいやい、若旦那ヤレ〳〵嬉しや〳〵、何がお前樣のに行衞方〳〵
と尋詫、此奥州路へ志、參つた所が勝手さらず、泊りをはづして先の宿へ
と、參る道ゑて此騷動、飯沼と申事が耳ゑ留り、何でもこいつ狼藉者と、め
つたやたらゑ投ちらしましたが、扨いお旦那ででいりましたか、ムヽそん
ならア此人が、兼々噂をさしやんした、筆助殿とやらかいな、是い〳〵〳〵
是いと三人が、はからず廻り奥州ゑ盡ぬ奇縁ぞふしぎなる、筆助ぞく〳〵
小踊し、ヽヽ、余り嬉しくて、何から角からヤさふやら、胸がどつき〳〵と
踊まするいやい〳〵、チヽ、そふで有ふ〳〵、そんなら大方主の病氣も、何
お旦那ゑいに病氣とな、何筆助、鎌倉を立退て方色〳〵の艱難、大病の
上腰がぬけ、躄ゑ成たいやい何スリヤアノおに足が立ませぬか、是いゑたり
と立寄て見れ共分らぬ眞の闇、ヱヽ、何をいふても眞暗がり、弛者めが挑灯、

只今のもやくやで、どこへやらやりました、ヤお挑灯の貯へんでいりませぬか、何のそんな貯へが有物で、今でハ夫婦共非人の境界、エ、何とおつしやるアノ非人よヤレ〳〵夫程迄のハ苦勞艱難、此奴めがハ傍よおらバ、其ハ不自由いさせませぬ、イヤかふ致しませふ、何をいふても此闇でハ一向よ咄が見へない、此奴め貯へもございますれバ、是から跡の宿へ歸りませふいか樣明日ハ箱根へ發足の積り、首途を祝ふて出立せん、初花車を、イイと探り廻つて小屋の蔭、綱手を持て引出れば、筆助諸共かいはふし、俱よ乘たる車の幸、是忠孝の德右衞門、挑灯てらしどいや〳〵家内引連れ出來り、折角馴染だ躄殿、翌ハ箱根へ發足と、逝で咄せバ家内の者、名殘惜んで皆愁歎、おれも眞一度顔が見たさ、皆引連て暇乞よ來ました、近比あなずりがましいが、些少ながら金子一包賤別よ進ぜます、是ハ〳〵重〳〵厚いお志なれ共、只今本國ゟ家來が參れバ、最早貯よハ何ぼ有ても入

ん金、コレ是んおれが志ぞやんいのマア受納て下されマア是からんかゝの番と讓つて退ぞ其跡ん遠女房ん女房だけ、小袖ゑ手拭、紅白粉楊枝かね筆つど〳〵ゑ妻ゑ心を付燒刃、兄の虎松が清書紙、幾折有か白石の、名代の燒餅、弟が是ん土產の貰ひ溜男が錢百紙包下女ん、はつたい紙袋、胸一ぱいゑ涙迄添てやるこそ殊勝なれ、夫婦がつど〳〵一禮の樣子見るか筆助ん、イヤ私めん只今お國元か參つた家來め、見請ますれぞなたも〳〵いんふ樣もないぼ厚情、此樣子あら是迄も、定て何角ゑお心付、所詮お禮ん口でん盡ぬ、ハテ譯もない夫程の事でもござらぬ、併今近付ゑ成て、今別れるん余りほいおい、こおたゑも何ぞ賤別が進せたい物じやが、ヲヽ有〳〵と紙入か、心ん千金萬金丹かゞやく德の德右衛門、家内の者ゑも一〻ゑ暇乞して引出す、車の跡ゑ引添筆助、挑灯迄も假初の緣も馴染ん別れの涙見返り、見送る其中へ、ぬつと出たる溝口が、讐をめがけ切付る、透さず

かづいて溜池へ、どんぶり思ひす德右衛門出來た別れて、こそ「行空の

十一冊目

紅葉ばを、秋の錦と夕榮の瀧よ照添風色よ莊嚴增阿彌陀寺ハ、相州箱根山の麓よして代ゝ北條家の菩提所ゑ、先祖時政公の年忌よ當れバ氏政施主として千僧、供養の其序、非人施行の法の緣つどひ集る乞食ハ只布引の如くゑ、氏政の家臣刎川久馬、家來よ命じ夫ゝよ與ふる施行錢の山減よ隨ひ非人共、暫とぎれて見へけれバ、刎川汗を押拭ひ、扨ゝ廣大もおい非人めら、何ぼふ主命でも恩も情もつゝく物でない、先暫く差留よと、家來追やり床几よかゝり、一息ほつとつぐ所へ、瀧の方ゟ二三人、またとやく〳〵と出來れバ刎川ハ見咎め、イヤ〳〵儕らハどれから參つた、只今暫く休足を致さんと、家來共を差留よ遣したが、イヤ〳〵私共ハ、最前參りましたけれ共、余り群集致しましたよつて、一邊そこらを歩行てこふと、三人

連でアノ瀧を見よ參りました、扨紅葉が見事、ヅイうか〳〵奥山迄分入ましたが、とひやうもない澤山な事、中〳〵上方の高雄も通天もはだしでござります、あんな所できゆつと一てういいして、死ぎ止まい此病、ヤイ〳〵なまこよ、ソリヤ何いふのじや、チ、ほんよお、余り紅葉が見事なのよ浮れて、ヅイ一口はしらして退た、ヤイ〳〵夫で延引いたしましたのでござります、ハ、ハ、大分面白いやつだ、ソレ家來共くれい〳〵、はつと積だる施行の錢、一人前よ一貫づゝ、銘々取て押戴是ハ、ヤア有難いは施行、何とあんこよ、こんな結構な法會よ遂よ逢た事ハおいぎやないかい、チ、なまこがいふ通り、是迄の施行ハ五十づゝが關の山、又關八州を取てござるお大名ハ格別、何と月の輪よ、ソリヤ新米じやが、こんな目よ逢ば、乞食も又捨れた物でも有まいがお、そふ共〳〵、一躰、ヤア、こんな結構おは法事をなされますハ、どなたのは年忌でござります、イヤ今日のは法事ハ主人氏政公のは先祖北條時政公

の五百年忌のお取越、來正月の筈なれ共、氏政公今朝鎌倉を發駕有て、京都へは參勤則大磯がは中食だ、夫故此阿彌陀寺よおいて、一七日が間は法事の上、非人共へ施行を下さるゝのだ、何とお慈悲の事でないかと、久馬が詞の端〳〵を月の輪へふえん顔、ヤ氏政樣のは參勤へ、格年二月でへでざりませぬか、こじる奴、年忌さへお取越が有ば、は參勤もお取越が有へい、夫へそふと只今聞ばあんこだの、なまこだの、月の輪のと、わいらが名へ奇妙頂禮な名だが、何ぞ謂の有事かと、尋よなまこが進み出、是へ異名でござります、私が名へ八とヤますけれ共、生得酒が好で、呑がいなやぐよや〳〵致しまする、そこで誰が付た共なしよ、なまこ〳〵とヤます、又次よおりまする者へ次郎とヤますけれど、腹がだぶ〳〵ふくれてござります故、あんこ、又あちらのはしよおりまする奴へ、頬から胸から手足から、腰膝の邊迄、毛だらけでえつかい熊、そこで月の輪でご

ざります、こりゃ面白い、此間から佛事の役よされて、氣のめいつたどふぶくら、そち達が參つたで醵散を致した、其褒美よ供養の膳をくれんそち達が好む酒を振舞ふ、こりゃ〳〵家來共、アレ方丈の庭へ莚を敷て、彼等を取持〳〵と、思ひがけなき久馬が下知、寐耳よ水の三人ハ、三拜九拜うき立て、こりゃアア何たる果報だと、手の舞足の踏途なく、悅び勇、刎川よ去たがひ、てこそ入よけり、忠孝の、身よも因果ハ廻り來る、片輪車の飯沼を、乘て綱で手を初花が引も、たよハき女氣よ心計ハ勝五郎、車の助け竹杖を持手も寒き雲、風、箱根おろしの風の足漸庭よ引とゞめ、非人施行と書いた札、嬉しや爰と立寄て、勝五郎樣、此邊りハ山家故、紅葉の有よ雪が降、嘸寒かつたでござんせふな、イヤ〳〵、ふれハ車よ居れば、辛抱も仕よいが、大きお體を乘て、かよハいそなたが引苦勞、過分おぞや嬉しいぞよ、アレ又あんお事、女房よ禮いふ者がどこよ有物ぞいな、夫ハそふと、此阿彌陀寺ハ氏政が菩提所、けふ

の法事を手がしりよ、敵の安否を、ア、コリヤ壁よ耳、心を付きやいの、アイと呑込氣を配る、折からどや〳〵非人共振舞酒の戻り足、初花夫と見て、次郎様八様月の輪様、よい貰ひが有たやら、打揃ふてよい機嫌、施行にまだ有かへと、尋よ次郎に目をすへて、何じや、施行にまだ有か、有かないか往て見りや知るにい、一体此次郎様よ、ずぐら〳〵とぬかすに、どいつじやい、〳〵と、足ひよろ〳〵、月の輪に打笑ひ、こいつにめんよふ喰いを、めると腹立をる、コリヤ、ヤイありや躄の女夫じやにやい、何じや躄の女夫じや、サ、夫がけたいじや、一体アあいつに躄だてら、何であんなよい女房持てけつかるのじや、けたいが悪るふて腹が立にい、其上まだ業の涌にけふの施行じや、仰山な札建上つて、米から纔二合か三合か、くれ上るので有ふと思ふたに、エイカ所を一人前よ新太一貫宛じやに、其上きす迄引して終よ喰た事もない、結構な料理迄振廻上つたに、譯が知ぬじやないかい、そ

れでおりや腹が立て〳〵、腹わたがよへ返るわい、ひっぱくこに乞食一生よない、錢一貫づゝ貰ふて、ぇたみでおい上白たらふく呑で、結構な料理迄戴いたが何の腹の立事で、ぺッぺッぺッナア八よ、そふ共〳〵、一文の錢貰ふよさへ、五丁七丁付ても呉ぬ世の中、てんなマア結構な法會よ逢といふい、何たる有難い事じやと思へば、おりやもふ有難ふて〳〵、嬉し涙がこぼれると、ぇく〳〵と泣出せば、ひっぱくこに、こいつい又泣おる、色〳〵のけれ又も有もんじやふ、ここ〳〵コリヤ〳〵月の輪、わりや何がおかしいぞい、てんお結構お法事する人さへ有よ、おれい身上呑上、二親の彼岸よ當つても、油上一ッ宛さへ配られぬ樣よ成果、嘸や嘸父上や母上が、草葉の陰からゑらいてくだうぇやと、思ふて居やぇやるで有ふと思へば、是が泣ずよ居られふかと、ぇやくり上れば、ヤイ〳〵、わいらい泣たり笑ふたり、人をあへくるのかい、けたいが悪いぞ、何がけたいが悪いぞ、此樣お有難い事が何所よ有ふぞい、何が有

難い忌〳〵しいはい、勿体ないそんな事いやんないの、何が勿体ないぞ、何がいま〳〵しいぞ、何が勿体ない、何が忌〳〵しい、何が、何が〳〵、ワハヽヽヽヽコリヤたまらぬ、ハヽヽヽ臍がよれると打轉て腹をかゝへる笑上戸、泣上戸、めつたやたらに腹立上戸、果は一蓮托生に、皆々倒るゝ其風情笑ひ覆れて初花が、どふ〳〵皆寐やしやんしたはいなアイヤモ見て居るがよい慰み、次郎めが理屈もない事をぬかして、腹立をるおかしさ、サイナア八様の愁の段で、私しやお中がよれたはいなア、ホヽヽヽと諸共に、笑ひ上戸の月の輪がむつくと起て兩人が寐息を窺ひ手を仕へ、若旦那樣初花樣、筆助殿、ハツア只今此所で承れバ、北條氏政今朝鎌倉を發足し、參勤との取沙汰と、聞ば飯沼車を飛下、ナニ氏政が上洛とな、忝い、敵討の時節到來、上野諸共發足したか、ハツア否の安否は此筆助、大磯中食と承れバ、近寄樣子を窺はん、出かした急げ、しててゐなアと尻引からげ、大磯さしてかけり行、跡に夫婦は勇立、天を拜

し地を拜し、悦ぶこなたゝ臥たる兩人むつくと起て、うぬゝ飯沼勝五郎儕ゝ初花侍の頼みで詮義する、有樣ゝ白狀せいイヤ我〳〵ゝ左樣な者でゝ、ないと云さぬ、今三人が呶き叫、寐た顏で皆聞た、大磯へうせた月の輪めゝ、筆助といふ力强、出し拔たらもふ佛の椀、躍め、ぬかさゝや斯じやと云めかしる、腕首かづいて双方どつさり、性懲もなく起上り掴かかるを手玉ゝ突、手練と手練ゝ兩人ゝコリヤ叶ゝぬと逃て行油斷ならじと勝五郎見廻す後ゝ立切障子、さつと開けゞ瀧口上野、火鉢ゝかゝり寛〳〵と見下す敵ゝ優曇花の、時待得たる對面と、初花諸共詰寄て、珍らしや瀧口上野、うぬを討ふと此年月、難難を盡したゝやゝ、其方故ゝ父上も、むざむざとゞ切腹、恨ゝ儕、兄の敵、とゝ樣の仇、尋常ゝ勝負〳〵と詰寄たり、ハヽヽ汝が兄の三平さへ、只一討ゝした某、腰拔の分際で敵討とゝ云やらくさひ、うぬら兩人箱根邊りゝ、乞食と成てへちもふと聞釣出す爲の非

人施行、計略のわおと知ず、うか〳〵來るうつそり共、最早八方を取巻せたれば、ぢたばたえても最叶はぬ、此瀧口が心をかけた初花を渡し、其方は自滅致せ、ヤア譬腰膝は立ず共、うぬ如きゑ渡そふかいな、おらぬか、コリヤ初花、わりやどふだ、ヲ、かぶりふるはいやだおヤ、悪い合点、此上野ゑ隨へば、活計觀樂心の儘だがお、ヲ、譬縊て死る共、儕ゑ枕をかはそふか、何だ夫でもいやとお、よい〳〵、いやといふても今目前、ほへ頬かはかし靡けて見せふ、ヤア〳〵久馬縄付是へと下知の下、いつの間ゑかは早蔵を用捨縄目の猿轡、引立〳〵立出れば、夫と見るゑ二人は仰天、絶て久敷、鍔娘、のふおつかしといひたさも、身は云猿の猿轡泣ゑ外の事ぞおき瀧口はえたり顔、何と見たか、娘を所望すれ共、與へず、くたばつた新左衛門が死跡欠所ゑ致させ、早厥めを擒ゑした我威勢、立ふと伏ふと某が心任せ、躍めを思ひ切、上野が奥ゑなれば、九十九の家を取立、早厥めを姑と崇てくれる、又い

やだといへば、腰拔諸共なぶり殺し、否か應か〻生死の境、初花ゝとふだと非道の詞も差當る、八百取れて初花も俱ゝ無念の勝五郎、齒ぎしみ齒切、胸先へ差込癪、アットもだへる有樣ゝ初花惝り欠寄て、コレ勝五郎樣、時も時と折惡い此癪氣、せめてマア筆助なり共居やつたら、コリヤ女、其奴めは出し拔て、跡より多勢をかけたれば、今比いもふ寂滅思案仕替て某ゝ隨へ、おうとさへ云へば其腰拔、母諸共ゝ、助くれるがそちへの心中、八我ゝつらければ我又八ゝつらし、魚心有へ水心有じや、初花何と憎ふい有まいが、あと、猫撫聲の頬憎さ、喰付てもと思へ共、眼前母と夫の命我身一ッゝ競ぶれば、何憎からじと思へ共、現在獸ゝ肌ふれて枕をかいす苦しみい、身を八裂の刑罰と思へば胸も張裂て泣音、血を吐思ひなり、瀧口いるつぼゝ入ゑつ〳〵庭へおり立て、勝五郎が襟髮取てぐつと引すへ、ヨイ勝負せぬか、立合ぬか、ヨ、何だとこぼへるか、無念あか、足が立ぬか、ムウ手も叶はぬか、ヨ、いち

らしや〳〵、此樣なざまをひろいで、敵討といしやらくさいと、砂ゑ摺付ゑじり付、何と初花、是でもいやか、サア夫れ、サア猶樣ゑ及ぶれ不承知なよい〳〵、ソレ母親めから差通せ、畏つたと取て引伏、だんびらひらりと差付れば、アコレヤ〳〵、サア待て下さんせいな、待といいよ〳〵抱れて寐るか、サア〳〵〳〵と絶躰絶命、身の大難ゑ初花が何と詮方おき身ぞと、思ひ極めて、得心じやいいな、抱れて寐るか、アイ、其替り二人のお命、ムウ得心と有ば、いふた詞れ反古ゑも成まい、エヽ、命冥加お腰拔めと突放して立上り、ソレ繩付めも助てとらせ、ハッと其儘猿轡繩目も一度ゑ解捨て、白洲へかつぱと蹴落せば、せき留られし溜涙わつと斗ゑ取乱す、アヽ、コレ嘘樣、其歎きれ尤ながら、是非ゑ一羽れ狩人の、網ゑかゝつた身の因果、此身さへ得心すれば、波風なふ納る此場私しや夫が本望でござんす、サア〳〵本望じや、ゑ寄て、勝五郎樣、必ず此身を太切ゑ、ヲヽ、娘出かしやつた、此母が身一ッなら、切刻まれてもいと

んねど、太切な聟殿よ、替る其身ん手柄者、過分な女房、源氏の仇よ身を任した、常盤に前がよい手本、心の肌身を、ま、打解て、サア肌ふれるん此見の覺悟、何事も私が胸よ、此瀧口を清盛といい心地よい、釼を抱てねるも一興、是ゞ小田原の菊館へ立越、酒宴の上で比翼の床入、其時よん初花、今の悲しい其涙を、上野樣いとしいと、嬉し涙よ云つぽりと、泣せて見せふサアおじやと、引立られて行思ひ見送る思ひも鴛鴦の、胸の釼乃呑込瀧口、久馬も跡よ引添て小田原さして出て行、見送る母ん正体おくわつと計よ伏沉む、勝五郎顏を上、に尤じや〳〵〳〵、我々よ替り敵の手よかゝるとん、目の内よ見へたれ共、所詮おき命おれゞ、肌身をけがし上野を、一刀差通せよと、云含遣んせ共、何の及ゞふ女業、不便の最期をさせますと、聞ゞ母ん身も世も有れず、そふじや〳〵と欠行裾を引どゞめ、狼狽て何所へでざるゞとてへいこふぞ、菊館へ欠行、娘よ加勢をするんいの、サ、、、む心の

せくい尤おがら多勢の中へ踏込でい、親子諸共三途の道連、何と、サアせめてあおたいお命全ふ、一遍の香花を、手向てやつて下さりませと、頼夫も頼まるゝ母も涙よくづおれて亡身と聞ベカおくせめて未來を助んと、ほ寺よ有合鉦撞木常念佛の法の縁、俗名初花頓生ぼだいおむあみだ佛〳〵、鉦皷の聲の心身をつんざく如く勝五郎可愛やおアと取乱すアヽコレ聟殿、悲しひい斷りおがら宿世の業と諦めて、母のわしさへもふ泣ぬ、男だてら未練おん人と、いふ母の顔打守り、男で有ふが鬼で有ふが、是が泣ずよ居られふか、おむあみだ〳〵〳〵、聟殿母様おむあみだ〳〵、夫も珠數をくり返す回向よ時をぞ移しける、女程實恐ろしき物いおし、戀よ凝てい千仞の釼の中もいとひおく漸遁れかけ戻る、顔い紛いぬ、初花じやおいか勝五郎様、よふ爰よ居て下さんしたと、えがみつく〳〵母親い顔見て恟りそなたい娘、恐ろしい敵の中、どふして拔ておじやつたと、嬉い中よも

氣ゐそゞろ、勝五郎面を荒らげ、我々を慕歸りしを、貞心と言たけれ共、夫婦の緣もけふ限り、妻でない女房でないぞ、そりやまあどふして何故よ何故とゐ狠狽者め、我れ腰拔と成たる上、敵ゐ氏政加勢すれば、八十万騎よ余る助太刀、女おがらも近寄こそ幸、肌を赦させ一刀よても差通せと、最前常盤よなぞらへて、ヤ含め遣ゐせしよ、命を惜みのめ〳〵と立歸つたる不覺者、何をいふても此體一足だよも引れぬ苦痛、左あれば迚も迄思ひ込たる我存念やゐか晴さで置べきかと、用意の刀杖とおし立上れ共踏ためずどふと轉びつ這廻り、ヤ、淺間しやいかよ天命盡れば迚、得難き時の際と成、神も佛もケ程迄、見放し給ふか口惜やと、大聲上て叫び泣、初花夫を打守り、ソレ其樣よ業病を悔まゑやんすがいとしい故、敵の手へ囚ゐれて行ゐ幸、どふぞ透して一刀よても、恨ん物とこそ思へ、お前の機嫌を損ふ迚、わたしや戻つて來やせぬゐい奇、もふ〳〵いふよ

云れぬ、せつない、悲しい憂目をして戻つて來たのもお前の病氣を今一度儕と思ふ一念で、殘つた願が滿たさ故、娘何といやる、殘つた願ひといい何の願、其樣子嗅樣いに存じない筈そも鎌倉を出しより斗らずも夫の大病、冷病ひよ腰ひざをぴれ、躄と成たる業病、敵が討れぬ〳〵と、悔む主ゐ女の身で傍で見る目がいとほしく、今一度本腹させまし、兄ほの敵討さんと、私が命を代りよ立、此箱根の權現樣よ祈誓をかけ、塔の澤の白瀧に百日が其間、朝夕兩度身を打れ、垢離に清めて捧る命、日數も滿て百日の今朝迄行を遂負せ、今一度で滿る願、悲しや思いぬ災難で身い囚いれと成たれ共、夫の爲よ權現樣へ捧た此身、のめ〳〵と何の死ふぞ、死よやせぬ〳〵と、思ひ詰た此願望、幸爰よ流寄此水上い向ふの瀧津瀬、白瀧と心よ念し今一度の願を滿、權現納受ましますか、印を爰よてためし見んと、かひ〴〵敷も身繕ひかけ寄、山路よ散ちく紅葉、岨しき岩壁

いとひあく脛もあらわに分登る、其身わ跟木傳ふ猴離あく瀧に近寄べ、音冷まじく飛散水勢白糸乱す瀧の面、ざんぶと飛込とう〳〵と落くる水を結び上、念力凝して一心に合掌したる其有様、物狂わしく髪逆立身の毛もよだつ斗なり、操を感じて母夫祈誓を添て諸共に、合掌したる後ゑ窺ひ出たる刻川久馬、飯沼めがけ切込を、心得ひらりと飛だるはづみ、すつくと立たる勝五郎、恟り仕あがら切込刀、久馬が首わ花火の白玉虚空遙に飛散たり、母わ見るゑ打驚き、ヤア〳〵こあたわ足が立かいのと云れて其身も心付、扨こそ〳〵、初花が念刀の奇特正に顯わせしか、チエ、有難いとぞく〳〵小踊、母わ嬉しく延上り、コレ〳〵娘、そあたの祈誓わ届ひたぞやと、いふ聲響く瀧の面、凝す両眼見開きて、あら〳〵嬉しや、權現納受、有たるかと、いふぞと見へしが一團の靈火ひらめきて、俄に山鳴震動しあり し姿わ脛の衣、血汐の小袖瀧涙に流れ落るぞ怪けれ、こわ〳〵いかにと

見やる中寄來る筐取得る母、扼から一ッの首引さげ戻る奴の筆助が、それと見るよりどつかと坐し、口惜や初花樣い、敵上野が手よかしり、ほ最期でござりますと、わつとひれ伏忠義の涙、飯沼不審晴やらず、今迄爰よ有つる初花、心願滿るとは其儘よ、姿い消て小袖のみ、爰よとゞまる一ッの不思議、初花樣い今迄爰よ、ヲイノウ、聟殿の業病なをさんと、我一命を權現へ捧げ、祈つた印聟殿の病氣い平愈コレ、腰膝が立いいのふ、若旦那のほ病氣平愈し、お足が立しとお、ヱ、添い、お足が立かいやい〳〵〳〵、敵の樣子窺んと、大磯へかけ行道よて取卷多數、合点行ねば組子を捕へ、ゑめ上て樣子を聞ば、初花樣を奪取ん工みの次第、聞と其儘一足飛、無二無三よ切込ば、奴が手並よ皆ちり〳〵、其跡見れば女の死骸、五体ふきれ〳〵離れ〳〵、よく〳〵見れい初花樣、おむ三寶、おのれ上野めぼつかけて、一討とい存じたれど、若旦那のお身の上氣遣ひさよ、戻つて聞ば此有樣、何の

事だどがらちやがらと、嬉しいと悲しいとがごつちやゑ成て、一向此奴めいとんと譯が分らぬい、夢でいぬいかと鞠れ顔、勝五郎心付、扨い我詞を守り、上野を恨んと切付たれ、共女業、返り討ゑ成たるよぬ、ヤア、そんぬら今のい幽靈で有たかいのふ、コレ此お首が初花樣でごいりますいいのと、見せる現世の俤を、見る目もくれて勝五郎、扨い凝塊つたる一念ゑて、かかる奇特を見せけるか、ハア出かいたぬアと、聞ん母い正体ぬく、ぼんゑ武士程世の中ゑはかぬい者が有かいのふ、蝶ゑ花ゑと思ひ子の戀ゑやむ目がいちらしさ、添してやりたい計ゑ爺ぼい乃ゑ身を捨て、思ふ男ゑ添遂させ、初孫産せて花〳〵ゑふ榮へる末を見ゑふぞと、思ふた事も水の泡夫といひ娘迄、乃ゑかゝるのみぬらず、娘い五躰も離れ〳〵切〳〵ゑ迄成しと聞、此胸の苦しさいどの樣ゑ有ぞいのふ、是を思へば先達て死だがましで有た物、わしきなき世の憂目やとわつと一度ゑ聲立て、歎く涙

ゝ白糸を乱せる瀧ゝ異おらず、かゝる歎きの其折から、二人の非人ゝ大勢隨へかけ來り、闇雲め、最前ゝよふ手ひどい目ゝ合せたな、其替りゝ手下共連て來たのもさぶの頼み、げんさいめさへ、たくつたら、親めも儕もぶち殺せと、云付られたゝ寶の山、息の根さへ留たら金じやかゝれ〳〵と一同ゝ、むらがり懸れば飯沼筆助、おぎ立〳〵追ちらせば、闇雲めが足が立た、〳〵と一同ゝむら〳〵ぱつと逃散たり、追も無益と勝五郎こりゃ〳〵筆助正數敵ゝ氏政の同勢ゝ紛ん間、勝負の場所ゝ箱根の切所、先へ廻つて其方ゝ、一々同勢あらためよ、ヘッヘ、ゝ、面白し〳〵、加勢いか程有とても、奴が忠義の鋒ゝて切伏〳〵、上野めを、引ずり出すゝまたゝく中イヤ泡出といさみ立、母も支度と娘の首筐の小袖ゝ、ちつかりとむすぶ、其間ゝ飯沼が、車ゝ仕込し用意の着込、姿ゝむかしゝ返り咲、武運もひかる玉櫛笥箱根を、さして「いそぎ行

十二冊目

實東路ゑ隱れなき箱根の嶮岨千仞を、植たる切所いとひなく、侍壹人鷲掴み、宙を飛で筆助が、眞一文字ゑ欠下りて、一息はつとつく所へ、早厥引連勝五郎、斯と見るゑ〳〵筆助、氏政が膝元の同勢漸く、小田原を立しかど、先手ゐ關所こへつらん、敵の樣子ゐ何と〳〵、ハッ仰ゑ任せ先へかけ拔、關所前ゑて踏ばたかり、駄荷長持ゐいふゑ及ぺず馬乘侍、歩行若黨、宰領三度鑓持迄、一々ゑ引とらまへ、吟味致せど上野ゑ、似寄の者もは座なきゆ、こいつ壹人引提て參りでした、ヤア上野ゐ何所ゑゐる、ぬかせ〳〵ぬかさゑやかうじやと云め上れぺ、ヤアまず〳〵、上野樣ゐこなた衆が、覗ふのをこゐがつて、氏政公と入替り、お乘物ゑ乘てござると、云捨逃るを其儘ゑ、けさゑすつぱと奴が引導、心地よくこそ見へゑける、飯沼勇んで、チ、血祭り出來た〳〵、ソレ遠見、畏つたと筆助ゐ片邊の古木ゑよぢ登り、山下を

遙に見おろし〳〵、氏政が鎧印樫木坂に早見へり、は用意なされと云樣にひらりと飛おり主從ゝ敵を今やと待ぬたる、程なくいなゝくくつゝの音馬上の武士ゝ北條家に、勇士と聞へし近藤五郎、續て岸田半左衛門、同勢引連先乘の跡を振出す大鳥毛、鎧挾箱金紋の威勢かゝやく三ツ鱗邊りを拂ふ鉄乘物、待兼たりと三人が、無二無三に切込べ、わつと同勢崩れ立、逃る者にゝ目ゝかけず、及向ふやつ原一〳〵に或ゝけさ切車切、べらり〳〵となぎ倒す、一むれ欠くる備への同勢、筆助早厥渡り合かしこへこそゝいぞみ行、猶もうつまく北條方、皆悉切ちらし一息ほつと勝五郎、乘物めがけ欠寄所へ、欠來る近藤岸田の兩士、猶豫もなく切込を、心得たりと受留て、兩人合手に勝五郎、鎬をけづり行跡ゝ、人影たゆれべ乘物ゝ、ぬつと出たる瀧口上野、前後を見廻す其所へ此騷動に通りかけ、逃來る六部が行當り、うろたへ眼で逃行さま、木の根にかつぱと轉ぶを

見やり、つゝと寄て首筋引立、一ぱぎやつと回國ゝこくうを摑んで死てんけり、死がい引提其儘よ小影へ入跡又一群、なだれ立てゞ逃て行、跡打見やり上野ゝ、木蔭を出る六部の姿、斯共ゑらず勝五郎、兩士を切捨欠戻り、敵を尋る眼ゝ釣上、傍よ有とゝ氣も付ず、摺違ふてゞ行過る、かしこの方ゟ筆助ゝ、六部が向ふよ二王立、頻見よやゝらぬと大手をひろげ、笠たくらんと手をかける、其手を拂ふて行んとする、引戻さんと爭ふはづみ、編笠ぬげて見合す顏、扨てゝ上野へよい所で逢たなゝ、うぬゝ筆助、期成たら百年め、幾人成共返り討、觀念せよと言せも立ず、組で取んと筆助が、腕くび摑んで引付れゞ、しやくなと振ほどき、組合ねぢ合根限り、息をもんでぞいぞみしが、ひ腹を當られ筆助が、尻居よどふと倒れ伏、かかる所へ早厥がこけつ轉つかけ來り、思ゝず見合す顏と顏、そなたゝ上野、ゝ、早厥か、うぬも奴と諸共よ成佛させんと切込切先、かい沈んでは

つしと受、受をせんとゝ戰ふたり、手きゝおがらも女業、打合刀の手もおまり既ゝあやうき其所へ遠目ゝ斯と勝五郎宙を欠つて會稽の、時こそ得たりと渡り合三人一時ゝ切結び火花をちらして打合行、うんと氣の付筆助が邊り見廻し、南無三寶見失ふたと打見やる、向ふをきつと、慥ゝあれこそ志めたと一飛一もくさん、跡を慕ふて「追て行く、靈驗四方ゝいや高き權現堂の廣前ゝ、上野相手ゝ勝五郎、手練と〳〵のゝらみ合、傍ゝ義勢の早蕨も俱ゝかけ聲力を添、ヤア〳〵と打合打合はれ勝負切つ結んつ千變万化暫らく時をゞ、移しける、忠孝ゝつたき鋒ゝ切ゝくられて上野か、よろめく所を切倒す、折から欠來る筆助が、お手柄手柄と勇み立、直ゝ留めを差敵の、初太刀ハ飯沼二の太刀ハ、早蕨筆助諸共ゝ、年來覘ひし兄の仇、娘の敵主人の恨、一時ゝはれたる時正ゝ、文錄元年秋九月、箱根ゝ名高き敵討壁も立る弓取の譽ハ末世ゝ飯沼ハ、武士の太功ハ在世の美談

を龜鑑（きかん）と殘しける、

享和元年辛酉八月四日

箱根靈驗躄仇討終

明治廿五年五月八日印刷
明治廿五年五月九日出版

飜刻兼發行者　日本橋區通四丁目四番地　內藤加我

印刷者　日本橋區新和泉町壹番地　瀧川三代太郎

發兌　日本橋區通四丁目四番地　金櫻堂